

---

# チェネレントラ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チエネレントラ

### 【Zコード】

Z3460F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

継父や姉達に冷遇されているチエネレントラ。ところが彼女の優しさと聰明さを見抜いた老人により忽ち豪華なドレスを貸され王子の前に連れられて。ロツシニ二版シンデレラを小説仕立てにしました。

こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

### 第一幕 邸宅にて

大きいが随分古い家があつた。どうやらかつては立派な邸宅であつたようだが今ではその面影を残すのみである。樅の木の扉も何か古ぼけている。一見では幽霊屋敷に見えなくもない。とにかく古い家であつた。

だが中には人がいた。そこでは一人の年頃の少女の声がしていた。

「ステップはこうよ」

「いえ、こう」

見れば一人の少女がステップを踏みながら話をしている。暖炉の前で身体を軽快に動かしながら話をしている。赤い髪の少女と茶色の髪の少女だ。二人共顔は中の上といったところか。悪くはないが特にいいというわけでもない。ありふれた顔といえばそうなる。服はわりかし華やかである。それを見るとこの二人が一応身分のある家の者であることがわかる。だが今一つ気品といったものがない。二人共どちらかというとコメディアンに近い雰囲気であった。顔からではなくその仕草や言葉がそうなのであつた。

「ティーズベ、それは違うわ」

赤い髪の少女が茶色の髪の少女に言つ。

「ステップはこうなの」

そしてステップを踏む。だが名を呼ばれた茶色の髪の少女は顔をムツとさせて赤い髪の少女に反論する。

「クロリンダ姉さん、違うのは姉さんよ」

彼女もステップを踏む。見ればそれ動きが微妙に異なつている。妹の方が軽やかだが姉の方が優雅だ。年の差であろうか。

「こうなのよ」

「だから違うつて」

二人はそんな話をしている。その後ろの暖炉を掃除する一人の少

女がいた。灰にまみれ粗末な服を着ている。金色の髪も灰にまみれているが波がかり元は美しいのがわかる。その顔も化粧気がなく灰に汚れているがやはり整っている。とりわけ青い瞳が美しい。

「昔一人の王様がおられました」

「彼女は歌を唄つていた。やや低めの声である。低いがその声 자체は綺麗で軽やかであった。」

「王様はお妃様を探しておられました。」自身で探され三人の姉妹の中から一人の少女を選びました」

「彼女は掃除をしながら歌を続ける。歌は軽やかに流れている。

「贅沢がお嫌いな王様は純真で清らかな娘を選ばれました。そして一人で何時までも幸せに暮らしました」

「ちょっとチエネレントラ」

「一人の少女はその灰を被つた少女に顔を向けた。

「その唄の他に何かないの？もう聴き飽きたわ」

「そうよ。あんたはその唄が好きみたいだけれどね。あたし達はあんまり好きじゃないのよ」

「けれど私は」

チエネレントラと呼ばれたその少女は一人の声を受けてゆっくりと顔を上げた。

「この唄が一番好きだから」

「だから唄うのね。やれやれ」

「他の唄覚えたら？何か明るいのがいいわ」

「けれど私は姉さん達と違つて」

「末っ子だから、つていうのはなしよ」

クロリンダがここでこう言つた。

「それとこれとは関係ないわよ、唄とは

ティズベも続く。一人共不機嫌を露わにしていた。そして妹に対して言葉を続ける。

「大体あんたが家事をやるもの仕方ないでしょ、末っ子なんだし」

「それもお義母様の連れ子だつたんだし。それでも家に置いてもら

つているんだから文句言わない」「はい」

チエネレントラは姉達にそう言われ仕方なく俯いた。

「それにあたし達が王子様と結婚できたらあんたにもいいことがあるのよ。それはわかつてるでしょ」

「そりそり、あんたも王妃様の妹君、それは忘れないでね」「はい」

やはり力なく頭を垂れる。ここで玄関の扉をノックする音が聞こえてきた。

「あら、誰かしら」

「チエネレントラ、出て」

「はい」

チエネレントラは姉達に言われて出る。見れば貧しい身なりの老人であった。

「あの」

「何でしようか」

チエネレントラはその老人に尋ねた。別に侮蔑の目で見てなどはいなかつた。

「お恵みを」

「あ、駄目よチエネレントラ」

「人の姉が後ろから言つた。

「うちにはあまり余裕ないから。いいわね」

「けど」

「どうしてもつていうんならあんたの渡しなさいよ、いいわね」「わかつた?」「ええ

彼女は頷くとまず自分の部屋に戻つた。そして一杯のコーヒーと一片のパンを持って来るとその老人に手渡した。  
「少ないですがこれを」

そしてそのパンとコーヒーを手渡した。老人はそれを受け取ると

チエネレントラを驚きと喜びの顔で見た。

「本当に宜しいのですか？」

「はい」

彼女は頷いて答えた。

「是非お食べ下さい」

「それでは」

彼はそのパンとコーヒーを食べ、飲みはじめた。そしてコーヒーをカップを彼女に返した。

「有難うございます。おかげで助かりました」

「いえ、いいです。御礼なんて」

だがチエネレントラは微笑んでそう言った。

「困つておられる方をお助けするのは当然ですから」

「そうですか。何とお優しい」

老人は感動したような声を漏らした。しかし二度また後ろの姉達が言った。

「チエネレントラ、私達も困つてているんだけれど」

「ちょっとドレス持つて来て」

「あ、はい」

それを受けた衣装部屋に向かつ。扉は閉められ老人は何処かへ消えたと思われた。その時であつた。

派手な行進曲が流れてきた。そしてそれは家の前で止まつた。それから玄関の扉が開けられ大勢の制服を着た者達が入つて来た。  
「ドン＝マニフィコ様のお屋敷はここでしおつか？」  
先頭にいる一際大きな男が言った。

「あ、はい」

「そうですけど」

一人の姉が出て来た。そしてその大きな男に恭しく頭を垂れた。

「ようこそ、我が屋敷に」

「はい」

大男も頭を垂れた。

## 第一幕その一

「」の我等が王子ドン＝ラミー口様がお妃様を探しておられます  
「はい、それは御聞きしております」

「その花嫁候補を選ぶ舞踏会を王宮で開くことになりました。それで皆様を王宮へご招待することになりました」

「まあ、それは」

「何という幸せ」

いささか儀礼的な喜びの声であった。貴族社会に付き物と言えばそれまでであるが。

「皆様にはその舞踏会で歌つて踊つて頂きます。その中でとりわけ美しい方が王子様の花嫁、そして将来の王妃様となられるのです」

「王妃・・・・・。何と光榮な」

「王子様が直々に選ばれるのですね」

「はい」

大男は答えた。

「こちらにも来られていますよ」

「それは本當ですか！？」

「ええ、間も無く来られます」

「それは大変」

二人はそれを受けて顔を見合わせた。それから大男に対して言つた。

「少しお時間を頂けますか」

「王子様にお目通りする為の身支度をして参ります」

「どうぞ」

彼はそれを認めた。すると二人は急いで衣装部屋に駆け込んで行つた。それを開かれた扉の奥から見ている男がいた。先程の老人である。

「ふむ」

彼は一人の様子を見ながら頷いていた。

「あの二人は止めておいた方がいいだろうな」  
ティーズベとクロリンダを見ながらそう呟いた。

「コメティアンになるならともかくな。むしろあの貧しい身なりの娘の方がいい」

先程パンとコーヒーを手渡してくれたチエネレントラに思いを巡らす。

「頭の中に鍛冶炉があつて槌を打つている者達より遙かにいい。さて、これからどうなるか」

今度は大男を見る。

「彼等には仕事をしてもらおう。さて、わしはここに奥に引っ込んだ。

「着替えるとしよう。そしてまた一仕事だ」

それから姿を消した。屋敷の中では騒ぎが続いていた。

「ねえチエネレントラ」

「は」

「この帽子どうかしら」

「いいとりますよ」

「ねえチエネレントラ」

「は、はい」

「この靴はどうかしら」

「凄くいいとりますよ」

「ねえチエネレントラ」

「ねえチエネレントラ」

彼女達は衣装部屋の中で帽子や靴だけでなく羽飾りにネックレスも出しながらチエネレントラに問う。チエネレントラは二人の間を駆け回りながらそれに対応する。額に汗をかき必死であった。それが終わると一人の姉は胸を大きく張つて衣裳部屋から出て来た。

「これでいいわ

「完璧ね」

一人は顔を見合わせてニヤリと笑った。

「王子様は私のものよ」

「あら、それはどうかしら」

二人は互いを見つつ悠然と微笑んだ。だがその微笑みもやはり気品はない。何処かしら面白さと滑稽さが漂っているのである。

「ふう」

チエネントラはその後ろにいた。疲れたのか溜息をついている。だが姉達はそんな彼女にまた命令した。

「ねえチエネントラ、これを」

クロリンデが懐から何かを取り出してチエネントラに手渡した。

「あちらの方に。いいわね」

見ればお金であった。半スクードある。実はお金はあつたのだ。大男を指差しながらそう指示をする。

「わかりました」

チエネントラはそれに従いお金を大男に渡しに行く。そこに髭の老人が出て来た。

「貴方は」

「この方が我々の長でござります」

大男は恭しくそうチエネントラに言った。老人はにこりと頭を下げて微笑む。チエネントラは彼の顔を見てはたと気付いた。

「貴方は」

「まあまあ」

彼は右目を瞑つて微笑んで彼女に対して言った。口の前に右の人差し指を縦にして置く。

「こには静かに、いいね」

「は、はい」

チエネントラは小声さ囁く彼に対して頷いた。

「明日になればいいことがあるから」

「いいことが」

「いざれわかるよ。さて」

老人はそう言い終わると小声を止めチエネレントラに対して言った。

「有難うござります」

そしてお金を受け取った。それから一行を引き連れて屋敷を後にした。

「またおいで下さいませ」

「うむ」

「一人の姉達の見送りを受けて去る。屋敷には三人だけとなつた。」

「明日」

屋敷の中に残ったチエネレントラは老人の言葉を思い出していた。そして何があるのだろうと考えていた。だが何があるのか全くわからなかつた。彼女は首を捻つた。

「何なのかしら、私には全くわからないわ」

「ふう、やつと帰られたわ」

「やれやれね」

だがその考えは中断された。一人の姉が屋敷の中に戻ってきたのだ。そして彼女達はまた言つた。

「さあチエネレントラ」

二人の姉は彼女に顔を向ける。

「リボンとマントを持って来て」

「はい」

ティーズベに言われて衣装部屋に向かつ。

「私はクリームと髪油。とつておきのをね」

「は、はい」

リボンとマントを持って来るとすぐに化粧部屋に駆け込む。

「ダイアモンド」

「はい」

「私はサファイア」

「わかりました」

慌しく駆け回る。そして持つて来た物を姉達に手渡す。大忙しで

あつた。

「それにしても御父様は遅いわね」

「ええ」

とりあえず着飾つた姉達は汗をかくチエネレントラには目もくれずそう話していた。

「このことを早くお知らせしないといけないのに」

「それは私がやるわ、姉さん」

クロリンデが言った。

「何言つてるのよ、私が言うわ」

だがティズベはそれに反対した。

「私がお姉さんなのよ。忘れないでよね」

「あら、姉さんに大仕事をやらせるなんてできないわ」

しかしクロリンデはそう言つて反論した。

「妹は姉の役に立つものですから」

「何言つてるのよ、いつもぐうたらじてるくせに」

「それは姉さんの方じやないかしら」

「言つてくれるわね、全く」

「おほほ」

そんな話をしていると扉が開いた。そして大柄で顔の細長い老人が入つて來た。髪は白く目は黒い。その髪型と服装から貴族であるとわかるがどうにも品がない。細長い顔は何か馬にも似ているし目にも厳しさはなく俗っぽさとひょうきんさが漂つている。顔にもしまりがなく少し赤い。何処かの酔っ払いにも見える顔であった。

「ふうう」

彼は溜息をつきながら屋敷の中に入つて來た。

## 第一幕その二

「御父様」

二人の娘は彼を見ると笑顔で彼に駆け寄ってきた。だが彼はそんな娘達を不機嫌な顔で見た。

「えい、いい」

彼は手で娘達を追い払った。そしてやはり不機嫌な声で言った。

「御前達は今日限りこのドン＝マニフィコの娘ではないわ」

「どうしたの？」

「また何かあつたの？」

だが娘達は動じてはいなかつた。づやらいつもこんなことを言つてゐるらしい。見ればその声も顔も不機嫌なだけで怒つてゐるというわけではなかつた。憮然とはしていただが。

「全ては御前達のせいだ」

「私達の？」

「そうだ。今朝のことを見えているか

「今朝？何かあつたつけ」

「さあ」

一人は顔を見合させてそう言ひ合つた。

「覚えておらんのか、あの時のこと？」

「朝・・・・・。ああ、あれね」

「あれは御父様が悪いんじゃない。用事なのに何時までも寝ているから」

「口」たえはいい、あの時わしはいい夢を見ておつた。男爵たる者に相応しい夢をな

「ふうん」

「どんな夢なの？」

「では言おう。わしのその素晴らしい夢を」

やたらとむつたいぶつて話す。常識で考えてそう偉そうに話すこ

とでもないが彼は異様に胸を張つて話をはじめた。男爵らしい威厳を醸し出しているつもりだがやはりその仕草も表情もヨーモラスなものであった。彼はそれに気付いているのかないのかそうした動作を繰り返していた。大袈裟な身振り手振りで話を続ける。

「光と闇の狭間にわしはいた。そしてそこで一頭の素晴らしいロバを見つけたのだ」

「ふんふん」

「二人の娘はそれを興味深そうに聞いている。ふりをしているだけであった。

「そのロバに無数の翼が生え、そして飛んだのじゃ。それから鐘楼の上で玉座に座るように鎮座した。そこで鐘の音が鳴つた。ところがじや」

「ここで娘達を睨んだ。

「御前達が起こしてくれたのじゃ。それから慌てて家を出た。じゃが頭にあるのはその夢のことばかり」

「それについて知りたいのね」

「そうだ」

「彼は頷いた。

「一体どういう意味なのかな。鐘はおそらく祝いだろ？」

「うん」

「羽根は御前達で飛ぶのは今の生活におさらいばとこういふじやう。最後のロバはわしじや。わしは栄誉を極める身分になるのじや」  
かなり自分に都合のいい解釈をする。だがそれによつて彼は得意の絶頂に入った。

「どうじや、素晴らしい夢じやろうが」

「何か」じつければかりに聞こえるけれど

「ねえ」

「ええい、五月蠅いわ。とにかくじやな」

彼は娘達が賛同してくれないのでさらに機嫌を悪くさせた。

「わしは栄華を極めるのじやよ。多くの孫達に囲まれてのう

「ふつん」

「じゃあお祖父ちゃんになるのね」

「何を言ひ、わしはまだ若こ」

ムツとした顔でそう返す。

「しかしそれもこれも全ては御前達次第じゃ」

「ええ」

「わかつてゐるわ」

「一人は真剣な顔になつてそれに応えた。

「安心して御父様」

「きつと私がお妃様に」

「何言つてゐるのよ、それは私よ」

「私よ」

「まあよい」

マニーフィコはそんな娘達を宥めた。それから言つた。

「それで王子は来られるのか」

「先程使者の御一行が来られたけれど」

「ふむ、ではもうすぐじゃな。わしは運がいい」

彼はそう言つてにやけた顔になつた。

「王子様にお目通りが適うのだからな。それだけではなく

「私がお妃に」

「私が」

ここでも二人はいがみ合う。姉妹であるが妙に滑稽な光景ではあつた。権勢の前には血の?がりなど無意味といつことなのであらう。

「あの王子様がわしの娘をお妃に迎えられる。夢が現実となるのだ。

「エネレントラ」

「はい」

彼はここでエネレントラを呼んだ。

「コーヒーを。どぎきりのをな」

「わかりました」

「コーヒーを奮發した。暫くしてエネレントラがコーヒーを一杯

持つて来た。

「どうぞ」

「御苦勞」

それを悠然としたような動作で受け取る。そして一口飲む。

「ふむ」

あえて大人の風格ぶつた仕草をする。それから一人の娘達に顔を向けた。コーヒーのカップと皿は持つたままである。

「我が愛する娘達よ」

「はい」

「この屋敷は見ての通り半分壊れである。後の半分も壊れかけておる」

「はい」

「それを救い、つかえ棒になるのが御前達の役割だ。それはわかつておるうな」

「無論でござります」

あまりそは見えないとはいへ彼女達もまた貴族の娘である。家がどれだけ重要であるかはわかつていた。家柄なくしては貴族ではないのである。

## 第一幕その四

「そなた達はその頭を使わなければならぬ」

「はい」

「わかるな。服装や話し方に心を配れ、そして王子の心をその手の中に収めるのだ」

「わかつてあります」

「二人の娘はにこりと微笑んでみせた。

「この笑顔で」

「よしよし」

マニフィコはその笑顔を見て安心したように笑った。

「頼むぞ、ははは。チエネレンントラ」

「はい」

「これをなおしておいてくれ。ではな」

三人は話を終えるとそれぞれの部屋に戻った。後にはコーヒーを片付けるチエネレンントラだけが残った。彼女は台所にそのカップと皿を持って行こうとした。その時であった。

「御免下さい」

扉を叩く音がした。彼女は台所に駆け込みカップと皿を置くとすぐに戻った。そして扉を開けた。するとそこには先程の一行の制服を着た若い男がいた。

見れば従者の服を着ているがとても只の従者とは思えなかつた。

黒い髪は見事に整えられ黒い瞳を持つその顔は優雅に微笑んでいた。口も赤く顔立ちも軽やかなものであつた。そしてその立ち姿も優雅でありまるで貴族、いや王族の貴公子のようであつた。

「貴方は」

「私ですか」

その若い従者はチエネレンントラに問つた。

「はい」

「私は従者です。実はこの屋敷に用がありまして  
用件…………何でしょうか」

「Iの家にマニフィー男爵のI令嬢がおられますね」

「はい、そうですけれど」

「どなたでしょうか」

「三人おりますが…………」

「おや」

従者はそれを聞いて不思議そうな顔をした。

「二人ではなかつたのですか」

「それは建前のことで。男爵家ながら貧しく

「娘は一人までしか育てられない」と

「そうなのです。上の二人の姉はいいのですが末っ子の私が  
チエネレントラはそう言つて悲しい顔をした。

「この通りの姿なのです」

「何と」

従者はそれを聞いて思わず嘆息した。

「事情があるにしろそれはあまりではないですか」

「仕方ないのです」

彼女は悲しい顔のままそう答えた。

「私は男爵の本当の娘ではないのですから」

「本当の娘ではないとは」

「はい」

彼女は従者に對して話をはじめた。

「私の母は寡婦でした。そして男爵と再婚したのです」

「ほう」

「上の一人の姉は男爵の連れ子でした。つまり私は繼子なのです

「だからですか。そんな服を着せられているのは」

「服だけではありません。私は家事の一切をやつております

「それはまた」

「うちには貧しいから。仕方がないのです」

「うちには貧しいから。仕方がないのです」

彼女はここで微笑んでみせた。

「こんな話をしても仕方ないですかね」

「いえ」

従者はそれを否定した。

「そんなことはありませんよ」

彼は優しい声でチエネントラに対してもう一つ言つて慰めた。

「貴女がお優しい方であるといつのはわかります

「どうしてですか？」

「その瞳です」

従者はチエネントラの瞳を見て語つた。

「瞳が

「そうです。私は師に言わされました。人を見るにはその瞳を見よ、

と

「はい」

「貴女のその瞳はとても綺麗で澄んでいる。心根の汚い者はそんな瞳は持つてはいない」

「そうでしょうか」

「私はそうだと思います。ですから私は」

「私は」

続きを語りつとした。だがここでそれぞれの部屋から一人の姉達が出て来た。

「ねえチエネントラ」

「ん!?」

「はい」

従者はそれを見て顔を上げた。そして一つの部屋をそれぞれ見た。

「ちょっと来て」

「こっちも」

「はい」

チエネントラはそれに従い部屋に向かった。一つが終わればもう一つに。まるで小間使いのようつであった。

「ふむ」

従者はそれを見ながら考えていた。その目はチエネントラから離れることはない。

「あの瞳からは唯ならぬものを感じる。何という美しい瞳か。そしてその姿も」

粗末な服を着て汚れてはいるが彼にはしかと見えていた。彼女の美しさが。だからこそ彼女から目を離さないのであった。

「素晴らしい、何と素晴らしい娘なのだ。是非私の妻にしたい。しかし」

彼はここで屋敷の中を見回した。

「マニーフィコ男爵は何処だ。確かにいる筈だが」

「従者殿が来られたようだな」

「はい」

ここでマニーフィコの部屋の奥から声がした。そしてチエネントラに案内され彼が姿を現わした。一人の姉達はその後ろについた。

## 第一幕その五

「やあ、これはどうも」「

恭しく従者に頭を垂れる。従者はそれに挨拶を返す。  
「して殿下は」

「もうすぐお着きになられます」

従者はそう答えた。

「左様ですか。それでは」

マニフィコはそれを受けた娘達に顔を向けた。

「その間に準備を整えておくよつて」

「畏まりましたわ、御父様」

彼女達はそれを受けて恭しく挨拶をする。

「それでは」

そしてその場を後にする。マニフィコはそれを見送つてから従者に顔を戻した。

「困った奴等でして。何しろ鏡の前に行くとそこから戻つて来なくなるのです」

「はあ」

「しかしすぐに戻りますので」「女心下さこませ。宜しいですか」

「勿論です」

従者はそう答えた。顔では大人しく頷いているだけであったが実際は色々と考えていた。

（何か変わった男だな。威厳あるつもりだが滑稽にしか見えない）  
マニフィコを見ながらそう考えていた。

（娘達もだ。貴族といつよりは喜劇役者の方がだが。だがあの娘は違う）

ここで彼の後ろにいるチエネントラに顔を向けた。

（我が師アリドーロが教えてくれた心優しき娘。あの娘に違いない）  
彼にはわかつていた。そしてまたマニフィコに何か言おうとする。

だがここで扉の方から大勢の人々が入つて來た。

「殿下が來られました！」

「えつ」

「早くしろ、早く！」

マニーフィコは娘達を急がせる。彼女達はそれに従い部屋から飛び出て來た。そして下に降りて來る。チエネントラは台所の方に身を隠した。そこからそつと見ている。

先頭にいるのは先程の大男であった。彼は一行の先頭に立ち屋敷の中に入つて來た。そしてその中で一際見事な服に身を包んだ青年が出て來た。大柄で人なつっこい顔をしている。髪と目は黒く、とりわけ目は大きい。まるで皿のようである。

「殿下であらせられます」

従者はその大柄な青年の前に來てそう言つた。

「これは」

マニーフィコト娘達は頭を垂れる。

「御会いできて光榮であります」

「うむ」

王子はそれを受けて満足そうに頷いた。

「顔をあげて」

「はい」

マニーフィコ達はそれを受けて顔を上げる。そして王子の顔を見た。

王子は三人が顔を上げたのを受けて言つた。

「今日私がここに來た理由はわかつてゐるね」

「勿論でござります」

三人はそれに応える。

「じゃあ話は早い。私のお妃だが

「はい」

「美しく、そして聰明でなければならぬ。それでいて心優しく気品があり高貴で。その様な女性を探しているんだよ」

「それでしたら」

ティーズベとクロリンゲが前に出る。だがマーフィーがそれを止めた。

「待て」

そして娘達に小声で囁く。

「どうしてですの」

「慌てるな。焦つては駄目だ」

彼は娘達に対して囁く。

「慎み深そうに見せるのだ。よいな

「ええ、わかつたわ」

二人は父の言葉を理解して頷いた。それから三人は何やら相談をしている。それは王子も同じであった。

「殿下」

何故か王子が従者の耳元で囁いていた。

「これで宜しいですね」

「ああ」

従者はそれを聞きながら頷く。

「ダンティーー、中々いいぞ」

「有難うございます」

彼はそれを受けて微笑んだ。

「どうやら彼等はラミー口様のお顔を知つてはいなつですね」

「まあ普通はそうだろうな」

彼はそれを受けて頷いた。

「普通は儀式やら応接やらで宮殿から出られないからな。ここに来てのものがじめてだしな」

「そういえばそうでしたね」

「うむ。しかし市井というのもいいものだな

「そうでしょう」

王子、いや仮の王子であるダンティーーはそれを受けて微笑んだ。「庶民の暮らしをお知りになるのもいいことですよ。アリドー口様もそう申し上げておられましたが

「どうやらやうみたいだな。ではな」

「は」

従者、いや実は本当の王子であるハーロはダンティーーから離れた。そして丁度相談を終えたマーフィー達に顔を向けた。どうやら彼等はあえて王子の替え玉を立てて何かと見ていくらしい。

「ダン＝マーフィー男爵だったか」

「は」

マーフィーは名を呼ばれてそれに応えた。

「そこそこるのが卿の娘達だな」

「左様で」やこます

「ふむ」

ダンティーーはそれを受けて頷いた。そしてティーズベとクロリンデを見る。

「見た？」

「ええ」

見られた二人はそれぞれ囁き合つた。

「殿下は私達の方を御覧になつてゐわよ」

「わかつてゐわ」

「いい調子よ」

「そうね」

「そうね」

彼女達はもう王妃になつた氣分であった。マーフィーもやれを見て満足そうである。

「これでよし」

満面に笑みを浮かべて笑つてゐる。頭の中ではもうこれからこの二つについて考へてゐる。

## 第一幕その六

「閣下から陛下か。ふふふ」

「さてさて」

「だがそれを見ながらダンディーーーとラリーーーは全く別のことを考えていた。

「この三人は上手く動いてくれそうだな。面白うことになつてきた」「あの娘は何処だ」

「これから起らるであろうことを思いほくそ笑んでいるダンディーーーに対してもラリーーーはチヒネレントヲを探していた。

「何も隠れることはないのに」

「さて」

「だがここにダンディーーーが芝居をはじめた」

「そこに元の一輪の花」

「私達のことでしょうかーーー?」

「無論」

「彼はそれを受けて頷いた。

「はい、その通り」

ダンディーーーは頷いてみせた。

「どちらもまるでエトルリアの像」

「まあ」

「二人はそれを聞いて思わず喜びの声をあげた。

「身に余る光栄でござります」

「いやいや」

「彼は鷹揚に頷く。そしてまたラリーーーに囁いた。

「如何ですか」

「中々いいぞ」

ラリーーーはそれを受けて頷いた。

「その調子だ、いいな」

「わかりました」

「彼は主にそう言わるとまたはじめた。

「私がある国に使節として向かいこの国に帰ったその時既に父であられる王は病床にあられた」

「はい」

「おいたわしや」

それを聞いて皆頭を垂れた。皆王への忠誠は持っていた。

「そして私にこう言われた。すぐに妻となるに相応しい者を探し出して選べと。それを受けて私は今この屋敷にいる」

「左様でございましたか」

「うむ。それで」

ダンディーは話を続ける。ラミー口はその間に辺りに田をやりチエネレントラを探す。そして遂に彼女を台所のところで見つけ出した。

「そこにいたのか」

そしてダンディーにまた囁いた。

「この屋敷にもう一人娘がいるかどうか尋ねてみろ」

「はい」

彼はそれに応えた。そしてすぐにマニフィコに尋ねた。

「男爵」

「はい」

「この家にいる娘は一人だけかね。何でも三人いるそうだが」

「あ、それは・・・・・」

彼はここでバツの悪そうな顔をした。

「実は・・・・・」

「何かあつたのかね」

「はい」

彼は暗い顔を作つて答えた。

「実は亡くなつてしまいまして」

「そんな・・・・・・」

台所の方でそれを聞いていたチエネレントラは今にも泣き出しそうな顔になた。

「言つに事欠いて何ということを言つのだ」

ラミー口はそれを聞いて怒りを覚えたがそれは何とか抑えた。そしてそのまま従者になりすまして様子を見守つた。そしてダンディーにまた言つた。

「そこの台所のところにいる娘は何なのか聞いてみろ」

「はい」

彼はそれに従いまたマニフィコに尋ねた。

「それではあそこにいる娘は何だね」

「あそこ？」

「台所のところだ」

「ああ、あの娘ですか」

マニフィコは納得したように頷いてから答えた。

「使人です。我が家の一

「そうだったのか。ふむ」

ダンディーはそれを聞き納得したふりをしてみせた。

「少しあの娘を見たいのだがいいかね」

「あの娘ですか」

「そうだ。よいかね」

「殿下のご命令とあれば。これ」

彼はチエネレントラに声をかけた。

「殿下が御呼びだ。失礼のないようにな

「けど・・・・・」

チエネレントラはそれに戸惑つた。自らのみすぼらしい格好を恥じてゐるのだ。だがここでラミー口はまたダンディーに耳打ちした。

「格好はどうでもいい。早く来るようと言え」

「わかりました」

彼はそれに答えてまた言つた。

「服装なんかは気にしない。早く来るよつて」

「殿下の御言葉だ。早く来なさい」

「わかりました」

彼女はそれを受けて顔を俯け恥ずかしそうに出て来た。そしてラミー口達の前にやつて來た。

「彼女が我が家の使用人でござります」

「宜しくお願ひします」

チヨネレンントラは頭を下げた。ダンティーーは彼女に顔を上げるよつて言つた。

「はい」

彼女は顔をあげた。だがそれを見ているのはダンティーーではなくラミー口であつた。彼女もそれは同じであつた。

「それで」

ラミー口はまたダンティーーに囁いた。

「彼女を宮殿に呼んではどうかと言つてみる」

「はい」

それを受けてまたマーフィー口に對して囁いた。

## 第一幕その七

「男爵」

「はい」

「彼女も宮殿に呼んではどうかね」

「ご冗談を」

「彼はそれを聞いて笑つた。

「この娘は単なる使用人ですよ。それを」

「構いません」

しかし彼はそれでもそう答えた。

「わかつて言つているのです」

「しかしですな」

「続ける」

ラミー口はダンティニーにそつハッパをかけた。

「いいですか。それとも彼女を宮殿に入れでは何か不都合でもあるのかな」

「いえ、それは」

そう問われてやはりロゴもつた。

「では問題はなし、ということで」

「いえ、そういうわけにはいきません」

それでも彼は引き下がらなかつた。

「こちらにも何かと事情がありまして」

「次の国王の命令でも?」

「滅相もない」

そう言われて彼は顔を真つ青にさせた。表情も凍りついてしまつた。

「何故殿下のご命令に逆らえましようか」

「ならばわかつてゐるな」

「しかし衣装が」

「それなら問題はありません」

「ここでラミー口が出て来た。

「全てこちらで用意しますので」

「しかしですね」

「あの、もういいです」

だがここで当のチョネレントラがそう申し出た。

「私のことはいいですから。皆さんもつ私のことは眞にならないで」

「しかし」

今度はラミー口がそれを止めようとした。だがチョネレントラの方が早かつた。

「構いませんから」

そして台所の方に姿を消した。ラミー口はそれを追おうとしたがここでの髭の老人が出て来た。

「先生」

「殿下」

彼はラミー口に小声で言った。

「ここは私にお任せ下さい。いいですね」

「わかりました」

彼はそれに頷いた。そしてここには彼に任せることにした。

老人はまず裏手に回った。そしてそこから台所の方に来た。そこからそつと中に入った。見ればかなり酷い台所である。まるで廃墟のようであった。

「こんなところで料理ができるのだろうか」

老人はそう思いながら中に入る。そして中を見渡した。

そこにはチョネレントラが蹲つっていた。そして一人泣いていた。

「これ」

老人はそんな彼女に声をかけた。チョネレントラはそれを受けて顔をあげた。

「貴方は・・・・」

「悲しむことはないよ。私の名はアリゾーロといつ

「アリゾーロ」

「アリゾーロ」

「アリゾーロ」

まずは彼女を安心させる為に名乗ってみせた。  
貴女の力になる為に参りました」

「けれど私は

「悲しまれることはないのです

拒もうとするチハネレンントラに優しく声でそう語った。  
貴女の本音を御聞きしたいのですが」

「はい」

「今の状況から出たいですね」

「はい」

彼女はそれに答えた。

「今の惨めな立場はもう…………けれど私はほんとうにヒ  
モ」

「できるのです」

アリゾーロはまた言った。

「貴女にはその力がおあります」

「そうでしょうか」

「はい。今あそこにいる者達ですが  
マニーフィコとその娘達を指差す。

「あの者達は所詮は道化です。近づくうちに道化に相応しい目に遭う  
でしょう」「うう」

そして今度はチハネレンントラに對して言った。

「ですが貴女は違います。貴女のその御心は私は知っているつもり  
です」

「有り難うござります」

「ですからその御心に相応しい幸福があらなければなりません。そ  
してその幸福は」

言葉を続ける。

「私が授けましょ」

「貴方が」

「は」

アリドーロはそれに答えて頷いた。

「その為にこちらに参つたのですから」

「お気持ちはわかりますが」

だがチエネントラの不安そうな顔は変わらなかつた。

「何故私にそこまでして下さるのですか」

「先程の御礼です」

アリドーロはそう答えた。

「貴女は先程私にパンとコーヒーをくださいましたね」

「はい」

「それへの御礼です」

「そんなことで」

だが彼女はそう言われても信じよつとはしなかつた。

「私をからかつてはいるのではないですか？」

「滅相もない」

だがアリドーロはそれを否定した。

「宜しいですか」

「はい」

「御心を高く持つて下さい。貴女はその氣高く優しい御心故に救わ

れるのですから」

「あの」

だがチエネントラはそれでも表情を暗いままでしていた。

「一体何のことかわからぬのですけれど」

「それでしたら」

彼はそれを受けて語りはじめた。

「貴女も神は信じておられますね」

「は」

チエネントラはそれに答えた。

「勿論です」

「ならば話が早い」

アリーデー口は話を続けた。

「神は心優しき者をお救いになられます。 そう、貴女のよつな方を「私を」

「そうです。 その為に私はここに来たのです。 神は常に天界の玉座にて貴女を見ておられます」

「何と」

「神が貴女を救われるのですよ。 今までの苦労、そしてその御心をお知りになられて。 聴こえませんか」

チエネレンントラに語る。

「神の御声が。 さあここを出ましょひ」

「けれど」

「御心配なく。 彼等も宮殿に向かいます。 貴女に對して何かを言つ者はいません」

そう言つてチエネレンントラを安心させた。 そして彼女を裏から台所から出して導く。 しかしチエネレンントラはそれでも行こうとはしなかつた。

「おや」

アリーデー口はそれを見て言つた。

「まだ戸惑つておられるのですかな」

「は」

彼女は首を縦に振つてそれに応えた。

「信じられません、そんなお話

「今はそつでしう」

彼はにこりと笑つてそう言つた。

「ですが徐々にわかってきます」

「そうでしょうか」

「ですから」ちぢらへ。 そして馬車に乗りましょひ

彼女をさらに導いた。 チエネレンントラは戸惑いながらもそれに従

いついていく」と云した。

見れば表からマニフィーと姉達が出ていた。そして馬車に乗せられ時殿に向かう。チエネレンツはそれを横田で見ながらアリーダー口に従つて進む。

「あ、これ」

そしてアリーダー口の馬車と一緒に乗つた。そして彼女も何処かへ向かうのであった。

## 第一幕その一

第一幕 宮殿にて

宮殿に案内されたマニーフィコ達はダンディーーーに食堂に案内されていた。白い白皿の宮殿に無数の煌びやかなシャングリラが輝いている。彼等はその中で艶やかな服に身を包んでいた。そしてテーブルにそれぞれ向かい合つて座り何やら話をしている。

そしてその中で得意気な顔をしている。とりわけマニーフィコは上機嫌であった。何やらダンディーーーに話をしていた。それはどうやら講義のようなものらしい。

「ふむふむ」

ダンディーーーはそれを聞いて頷いていた。

「貴方は実に博識であられる」

「いやいや」

マニーフィコは謙遜する素振りを見せながらもやはり有頂天にあつた。

「何処でそれだけのワインに関する知識を手に入れられたのですか

な

「いや、これは」

彼はにたにたと笑いながらダンディーーーに對して言つ。

「唯の趣味が高じたものであります」

「ほう」

ダンディーーーはそれを聞いて興味深げな顔をした。

「好きこそもの上手なれといいますからな」

「そういうわけではないですが」

「それでもそれだけの知識は素晴らしいものです。これ

「彼はここで側に立つてゐるワリーロー口に声をかけた。

「男爵を酒の貯蔵庫に案内するよつこ」

「わかりました」

「ハミー 口はそれを受けて頷いた。そしてマーハイ 口のヒンカラ  
つて来た。

「それでは男爵、ハハハハ」

「あの、殿下」

案内されることになつたマーハイ 口はヒンカラダンティーーに尋ね  
た。彼が偽の王子であるといつては全く気付いてはいないのであ  
つた。

「何故貯蔵庫に」

「これから貴方を試させて頂きます」

彼はにこりと笑つてそう答えた。

「三十回試し飲みをして頂きます」

「三十回の」

「やうです。それでふらつきもせず、しつかりとしておられれば貴  
方は酒倉役人です。丁度今開いておつまみて」

「酒倉役人に」

マニフィコはそれを聞いて思わず田の色を変えてしまつていた。  
「それは本当ですか！？」

「はい」

ダンティーーは笑顔で頷いた。

「三十回ですよ。宜しいですか」

「勿論です。是非やらせて下さい」

そして彼はそれを快諾した。そして席を立つ瞬間にそつと娘達に  
耳打ちした。

「後は頼むぞ」

「お任せ下さいな」

「期待しててね」

「うむ」

マニフィコはそこで席を立つた。だがヒンカラダンティーーはハミー  
一口を再び呼んだ。

「はい」

ラミー口はすぐに彼の側に来た。そして耳をそばだてた。

「これで宜しいですか」

ダンディーはそつと彼にそつ尋ねてきた。無論マニフィコ達には悟られないようにして、である。

「ああ、上出来だ」

ラミー口はそれを聞いて頷いた。

「それでいいぞ」

「有難う」ぞいります。あとは

「わかつている」

ラミー口はその言葉に応えた。

「ここは御前に任せると。あの一人をよく見てくれ

「はい」

そう答えてティーズベとクロリンにて田をやる。

「あの一人のことはお任せ下さ」

「うむ」

「全てを見極めてやるつもりです」

「頼むぞ。だが大体はわかつているな」

「そうですね」

彼はそれに答えた。

「まああの一人の心は見せ掛けだけのメロンです」

「外見だけか」

「そうでしじうね。才能はがらんじつの型押し器、頭の中は空家となつております」

「上手いことを言つたな」

「いえいえ」

にやりと笑つた主に対してもう返す。

「それではここは頼んだぞ」

「はい」

そして二人は仮の関係に戻つた。ダンディーはラミー口に命じる。

「では案内しておきましょう」

「はい」

「うしてマーフィーはラリーに案内されて酒倉に向かった。そして後にはダンティーー一人の娘達が残った。彼はここで二人に顔を向けた。

「これでゆっくりとお話ができますな」

「はい」

「人はそれを受けて頭を垂れた。

「恐れ入ります」

「いやいや」

「そう言われてこそか謙遜を覚えながらも話を続ける。

「それでお話ですが」

「はい」

「貴女方はそもそも姉妹であらせられます」

「はい」

「それは愛の轆轤により回され出来上がったものでありますな」

「御言葉ですが」

「ここでティーズベが言った。

「私は長女でござります。それをおよく御存知下さいませ」

「いえ」

「しかしここでクロリンゲーも申し出でてきた。

「私の方が若いですわよ」

「そう言いつつ姉の方に顔を向けて得意気に笑う。

「若い方が宜しいですわね、殿下も」

「ううむ」

戸惑うふりをする。それに乗つてティーズベがまた動いた。

「殿下」

「そしてダンティーーに対してまた言った。

「子供より大人の方がものを知つております」

「あら、それは」

だがクロリン<sup>テ</sup>も負けではない。  
「塩が欠けた水は味がありませんわ。塩も時間が経つと下に沈んで  
水には味がなくなりますわ」

「ふむ」

「ですから私<sup>ニ</sup>」

「いえ」

しかしティーズベも負けではない。

「私の塩は永遠です」

「殿下」

クロリン<sup>テ</sup>が逆襲に出た。

「私の唇を御覧下せ」

「はい」

「よく御覧遊ばせ」

そう言つてダン<sup>テ</sup>イーーに自分の唇を見せる。

「赤いでござりましょ<sup>フ</sup>」

「ええ」

「口紅などつけてはおつませんわよ。そして<sup>リ</sup>の白<sup>ニ</sup>肌も」

「殿下」

しかしそこをティーズベに突つ込まれる。

「それは白粉のせいですわよ」

そして言葉を続ける。

「<sup>リ</sup>の髪を御覧になつて下れこまし。女の命は髪」

「はあ」

「髪に勝るものはありませんわ」

「殿下」

クロリン<sup>テ</sup>も自分の髪を見せる。

## 第一幕その一

「私の髪は如何でして」  
「うつむ」  
「では私の歯の白さは」  
「爪の綺麗さは」  
「二人はもう何が何でもダンディーーーを自分の虜にするつもりであった。彼はそれを戸惑うふりをして相手をしながら一人に対して恐る恐るの演技をしながら言つた。  
「あの、二人共」  
「はい」  
「何でしようか」  
「もう少し落ち着かれて」  
「あつ」  
「私としたことが」  
「二人はそう言われて我に返つた。  
「宜しいですか」  
「はい」  
「二人は頷く。  
「私を信用して下さい。いいですね」  
「はい」  
「ですからここは私にお任せ下さい」  
「わかりました」  
王子にそう言われては流石に頷くしかなかつた。ダンディーーーはそれを確認した後でまた二人に対して語りはじめた。あえてゆつくりと語りつ。  
「まず」  
「はい」  
「決めるのは私です」

「はい」

「全てが決まつたならお話しします。いいですね」

「わかりました」

「こうして二人を黙らせた。こうして三人はとりあえずこの場の騒ぎを終わらせたのであった。」

三人が食事の間で騒いでいた頃マニフィコは酒倉で上機嫌でいた。ワインを次々と飲みながら周りの者に得意気に語りかけている。

「これは」

「はい」

「フランスのマルセイユ産ですな」

「おお」

「正解です」

「ふふふ」

彼は次には別の樽のワインを飲んだ。それから言つ。

「この甘さに発泡性があるところを見ると」

「はい」

「これはイタリアモテナのものですな」

「何と」

「その通りです」

周りの者は彼に向ひながら言つた。

「何とまあ」

「三十の樽のワイン全てを言い当てられましたな」

「どうですか、私のワインへの目利きは」

彼はやはり得意そうに周りの者に尋ねていた。

「かなりのものでしょ?」

「はい、全く」

「しかも全くぶらつかれてはおられない。素晴らしいです」

「生憎ワインは私の血として」

彼は語る。

「幾ら飲んでも酔わないのです」

「成程」

「将にワインの為に生まれてきたような方だ」「左様、これで私の実力がわかりましたな」「はい」

「ラミー口が答える。

「それでは貴方はこれから酒倉係となつて頂きます」「身に余る光榮でござります」

「そして貴方はこれから酒杯管理担当長官になつれ」「はい」

「葡萄収穫担当責任者になられ」

「何と」

「酒宴担当指導者になられるのです。館中の酒に関する事は全て貴方に一任されることとなりました」「素晴らしい、何という榮誉でしょうか」「貴方にこそ相応しいものであります」

「いやいや」

一応謙遜はしているがやはりマーフィーは得意気に笑っていた。「胸の中で花火があがつたようだ」  
「はい」

「それでは皆様」

「ここで彼は周りの者に對して言つた。

「これから私が言つことを書き記して下せらこませ。そして」「そして？」

「それをまた写して頂きたい。そうですね」

「彼は勿体ぶつて言つ。

「六千枚程。いいですか」

「わかりました」

皆頷く。彼はそれを確認してから大袈裟に口を開いた。

「それでははじめますぞ」

「はい」

ペンを手にする。そしてはじめた。

「我がドン＝マニフイコ」

「我がドン＝マニフイコ」

書こうとする。しかし「でマニフイコがまた言った。

「おつと、ここは大文字ですぞ」

「おつとつと」

「危ないとこりでした」

「気を着けて下されよ。そして」

「そして」

「そしてはいりませんぞ」

「わかつております」

そういうやりとりを続けながら書く。マニフイコは自分の名が大文字で書かれたのを書くにしてから再開した。

「我がドン＝マニフイコは極めて由緒あるモンテフィアスコーネの公爵にして男爵」

「おや」

それを聞いてラミー口が声をあげた。そしてマニフイコに対してもうた。

「公爵であられたのですか」

「ええ、先祖は」

彼は胸を張つてそう答えた。事実であるがかなり遠い先祖である。ハッタリだと言つても差し支えはない。

「まあ大したことではありませんが」

そう言いながら胸を張つているところを見てもハッタリであることがすぐにわかる。だが彼はそれを気にも留めず話を続けるのであった。

「大長官にして大指導者、その他一十に余る肩書を有する者として」「大長官にして大指導者、その他一十に余る肩書を有する者として」貴族は何よりも肩書が重要なのである。マニフイコも殊更にそれを強調しているのであった。

「その権限を大いに發揮し、これを読む者は命を受けるものとする」

「その権限を・・・・・」

書き続ける。筆記も楽ではなかつた。

## 第一幕のII

「十五年に渡り美味なる葡萄の酒に一滴の水も混ぜぬ」と  
「十五年に渡り・・・・・」

「左様、これが重要なのです」

「何故でしょうか」

ラミー口が問う。

「ワインは純粋に楽しむものですから。水など混ぜるのは外道  
なのです」

「外道ですか」

「少なくとも私はそう考えます」

彼は真剣な顔でそう答えた。

「本来の味を損なつものですから」

「そうですか」

他にも理由はある。悪徳業者を防ぐ為であるがマーフィー口などつ  
もりついこうじては関心がないようであった。あくまでワインの味  
について考えているようであった。

「それではまた言いますぞ」

「はい」

そしてまた言葉を再開した。

「違反せし時は逮捕し絞首刑とする」

「またそれは厳しい」

「それ程せねばなりませんが、これは

マーフィー口はラミー口に対しそう答えた。

「そもそもなければ違反者は消えません」

「そうこうのものですか」

「はい」

そしてまた言葉を続ける。

「理由は・・・・・」

「理由は・・・・・」

「それ故・・・・・年度・・・・・」

「それ故・・・・・」

そして筆記が終わった。それを見届けてマーフィコは満足気に頷いた。

「それではそれを町中に貼り出すよつこな

「わかりました」

「そして後は

「そうですな

マーフィコは悠然と答えた。

「宴といきましょつ、酒場にも繰り出して

「酒場に！？」

皆それを聞いて喜びの声をあげた。

「やう、皆で」

マーフィコは満面に笑みを讃えてそつ頷いた。

「わしのねいりでな

「うつむ、流石は男爵

「太つ腹ですな」

「いやいや

どうやら酒で気が大きくなつてこるらしい。上機嫌でそれに応える。だがそれだけではなかつた。

「まだあるぞ」

「それは何でしようか

「ビアストラの金貨だ。それも十六枚」

「本當ですか！？」

「男爵家の名にかけて嘘は言わぬ

「そしてそれほどして得られるのでしようか

「宴の酒はマラガのワインとする。それを最もよく飲んだ者に授ける。それでよいな

「はい！」

「男爵万歳！新しい長官万歳！」

「貴方に幸せが訪れますように！」

「ほつほつほ、よいよ！」

彼はそれを聞いてさらに機嫌をよくした。そして皆に對して言つた。

「ではこれから繰り出すとしようが、仕事も終わつたしな…」

「はい！」

皆マニフィコと共にその場を後にした。だがラミーロだけはその場に残つた。

「ううむ」

彼は去つて行くマニフィコの背を見ながら考え込んでいた。だが決して深刻な顔ではなかつた。

「妙な男だな、つぐづく」

マニフィコのことについて考えているのは言つまでもないことである。彼がどういった者であるか見極めようとしているのであつた。「根つから悪人ではないようだが。それにしても」

そう言いながらその場を後にする。

「変わつた男だな。どうするべきか」

そして王子の間に入った。そこにはダンディー二がいた。二人は落ち着いた雰囲気の部屋の中で話をはじめた。

「そつちはどうだつた」

まずはラミーロが問うた。

「あの二人ですね」

「そうだ」

「また変な者達です」

彼は口元を綻ばせてそう答えた。

「妙に見栄つ張りで勝氣で。悪者ではないですか」

「そうか」

「どちらも似たようなものですね。ただ結婚されるには考えられた

方が宜しいかと」

「それはわかっている」

ラミー口はそれにすぐそう答えた。迷いはなかつた。

「あの一人の父親もな。似たようなものだし」

「そうなのですか」

「ああ。今他の者を連れて宴に出ている」

「はあ」

「あれだけ飲んでもまだ飲めるらしい。それはそれで凄い話だが」「というと三十樽の酒を全て飲んだのですか」

「そうだ」

「それでまだ。まるで化け物ですな」

「東洋では蛇がそれだけ飲むそうだな」

「そうなのですか？」

「大蛇がな。日本ではそうらしいぞ」

「ここは日本ではありませんからな。さじづめ酒の神デイオーユン

スといったところでしそうか」

「そういうには品がないがな」

「それはそうですが」

「まあそれはいい。それでだ」

「はい」

「私の妃だが・・・・・」

それについて言おうとしたところで例の一人の娘達が部屋に飛び込んで来た。そしてダンディーの左右に張り付いてきた。

## 第一幕その四

「ねえ王子様」

「はい」

「どちらになさいますか」

「どちらと言われましても」

やはりここでも戸惑う演技をしていた。

「お一人としか結婚できませんし」

「それはわかつてあります」

「そして残られた方は」

「はい」

二人はそれを聞いてゴクリ、と息を飲んだ。緊張が一人の間だけに走った。

「私の従者と結婚されでは如何でしょうか」

「どうも」

ラミー口は紹介されて恭しく頭を垂れてみせた。

「彼も丁度妻となる女性を探している頃でして」

「えつ・・・・・・」

二人はそれを聞いて言葉を失つた。

「彼も貴族ですよ」

ダンディーは微笑んでラミー口をそう紹介した。

「由緒正しい。ゆくゆくは私の片腕をなるかも知れません」

「けど・・・・・・」

二人はここで顔を向け合つた。そしてヒソヒソと話をはじめた。

「どう思つ、クロリンテ」

「どうつて言われても」

「確かにハンサムよね。育ちも良さそうだし」

「それはそうね。けれど王子様じやないわよ」

「よくて伯爵位かしら」

「そんなところじゃないの」

「私達から見ればそりや玉の輿だけれど」

「王子様と比べたらねえ」

「そうよねえ」

相も変わらず取らぬ狸の皮算用であった。ラミー口とダンディー  
「はヒソヒソ話をする一人を横目で見ながら自分達も話をはじめた。

「面白いことを言つたな」

「有難う」<sup>1</sup>ぞいります」

ダンディーはラミー口にそう答えてにこりと笑つた。

「また面白いことを考へているようだな、あの一人は」

「ええ。見ていて飽きません」

「全くだ。これは後々まで話の種になる」

「そうですね。しかし話は何時か終わりがあるものですから」の喜

劇も終わることでしょう」

「問題はどういう終わり方をするかだな」

「ええ。面白い結末といきたいものです」

「うむ」

「殿下」

「ここ」で一人の従者が部屋に入つて來た。彼はラミー口に向かおつ  
としたが気付いてダンディーに向かつた。

「どうした」

ダンディーはそれを見て鷹揚に応える。

「アリドー口先生が戻られました」

「そうか」

彼はそれを受けてラミー口に顔を向けた。

「先生が戻られましたな」

「うむ」

彼は頷いた。そしてダンディーにまた何か囁いた。

「わかりました」

彼は答えると従者に顔を向けた。そして言った。

「すぐに」ひやりとお連れしてくれ  
「はい」

従者は頭を下げてそれに従つた。そして彼はアリドーロを呼びに向かつた。ティーズベとクロリンデはそれを見て話を止めてダンディーに顔を戻した。

「殿下」

「はい」

「そのアリドーロという方はどなたなのでしょうか」

「私の師です」

彼はそう答えた。

「師」

「そうです。先生です。幼い頃より私を教え導いて下さつた方でし  
て」

「はあ」

「私の第一の助言者です。あの方なくして私はないでしょ  
う」「それ程までに素晴らしい方なのでですか」

「その通り。さあ、来られましたぞ」

そしてアリドーロが部屋に入つて來た。貴族の服を着ている。彼  
はダンディーの前に來ると恭しく頭を垂れた。それから申し出た。

「殿下」

「うむ」

ダンディーは鷹揚に頷く。

「大広間に来られませんか。素晴らしい方が来られまして  
「素晴らしい方が」

「はい」

アリドーロはこゝにこりと笑つた。

「さる貴婦人が来られたのです。顔をヴェールで覆われて  
「貴婦人！？」

それを聞いてティーズベとクロリンデが思わず声をあげた。

「ほう」

ラミー口とダンティニーはそれを横目で見て笑つた。

「心から気になるよつだな」

「ライバル出現とでも思つていいるのでしょうか?」

「どうな

「そして」

ティーズベとクロリンテは一人のそんな日にも気付くことなくアリーロに聞いた。

「その貴婦人はどなたですかの！？」

「それは言えません」

彼は素っ気無くそう答えた。

「残念ながら

「やうやくやめた

「一本誰なのですか？」

「何がどうかわからぬ」

それはすぐはねた

「一レギー太郎、表行へるミーへ

「それで皆様行かれますか？」

「殿、どうなれども

「そりだな」

考へられて問われた一口一ミリ

「よし、行こう。大広間だな」

「はい」

「それでは行こう。さて

彼はここでティーズベとクロリンゲに顔を向けた。

「貴女方はどうされますか

「私達ですか？」

「ねー。阿豆（あづ）の部屋で本（ほん）を読（よ）むの？ あー、本（ほん）が

何でしからこの部屋で何んておらねてもいいので

だが一人は彼の申し出に首を横に振つた。

「私達も御一緒をせて下せ」

「よいのですか?」

「構いませんわ」

「そうですわ、どれだけ素晴らしい方なのか是非共御会いしたいです」

「無理をしているな」

「ハリーロビダンティニーはそれを聞きながらほくそ笑んだ。

## 第一幕その五

「さらにも面白いことになりそうだ」  
しかしそれは決して言わない。そしてアリドーロに従い大広間に  
向かつた。ティズベとクロリンテも後について行く。こうして彼等  
は大広間にやつて来た。

「おお、殿下」

先程の従者がダンディー二達を迎えた。

「よぐぞおいで下さいました」

「うむ。ところで」

「わかつてあります」

従者は笑みで彼に応えた。

「あちらにおられますよ」

そこには白と金の美しいドレスに身を纏つた女性がいた。ドレス  
の上からはいえかなり素晴らしい容姿の持ち主であることがわか  
る。そして気品も漂つていた。

だが顔は見えない。しかしそれでも彼女が素晴らしい貴婦人である  
といふことがわかつた。

「彼女が

「ええ」

アリドーロは頷いて答えた。

「あの方です」

「そうか」

ダンディー二は了承した。ラミーロはそのすぐ後ろでその女性を  
見ていた。そして胸の鼓動が速くなるのを感じていた。

「これはどういうことだ」

彼はそれを不思議に感じていた。

「何故彼女を見ただけで胸がこれ程。何かあるというのか」

だがそれが何故かはまだわからなかつた。彼はただその貴婦人を

見詰めるだけであった。

「つうむ」

ダンディーも見惚れていた。そして彼は貴婦人に対して語り掛けた。

「ヴェールをかけているとはいえ何という美しさだ」

彼女はそれを受けて頭を下げた。だが一言も発さず、物腰も静かなままであった。

「もし直しければ」

ダンディーはさらに言った。

「そのヴェールを取つて頂けぬでしょうか」

「わかりました」

彼女は一言そう答えた。そして、ヴェールを外した。中から金色の髪と青い瞳を持つ麗しい女性が姿を現わした。

「おお・・・・・・」

「何と・・・・・・」

皆その姿を見て思わず息を飲んだ。想像していたより遙かに素晴らしい顔立ちであったのだ。

とりわけラミーロの驚きようはすごかつた。彼はその女性の顔を一目見るなり完全に心を奪われたようであった。

「何と美しい・・・・・・いや、あれは」

ここで彼は気付いた。

「彼女か。まさかと思うが

「ふむ」

アリドーロはそれを横目で見ながら会心の笑みを浮かべていた。

「私の目に狂いはなかつたようだな。殿下はあの娘に心を奪われら  
れでいる

そしてそれは他の者、そうティーズベとクロリンゲも同じであった。  
彼女達もその貴婦人から目を離していなかつた。

「見た、あの美しさ」

「ええ」

彼女達はそう言つて頷き合つ。

「あんな綺麗な人ははじめて見たわ」

「私も。一体誰なのかしら」

二人は貴婦人を見ながらそう囁いている。そしてふとクロリンデが気付いた。

「ねえ姉さん」

「何？」

「あの貴婦人だけれど」

「うん」

それから何か言おうとした。しかしここで新たな客がやって来た。

「殿下」

マニフィコであった。彼は酒に酔いながら上機嫌で部屋に入つて来た。一礼してから入るのは忘れないのは流石に守つてはいたがかなり砕けていた。元々の地であろうか。後ろには先程彼が連れて行つた者達がついてきている。皆顔が赤いところを見るとかなり飲んでいるようである。

「宴の用意がでできておりますが」

早速仕事に取り掛かっていたようであつた。彼にとつてはそれが仕事であると共に趣味であるようであつた。

「ん！」

だが彼はここで気付いた。目の前にいる貴婦人のこと。そして彼女に目を奪われた。

「何と美しい」

その顔に見入る。だがここでふと気付いた。

「待てよ」

その顔を何処かで見たと思ったのだ。そして考え込んだ。

「そんな筈はない。彼女は今家にいる筈だ」

「御父様」

そこへティーズベとクロリンデがやって来た。二人は父に声をかけた。

「どう思つ、あの人」

「おそらく御前達と同じだ」

彼はそれに対してもう答えた。

「あまりにも似てあるな」

「そうよね」

「本当にそつくり」

二人もそれに対してもう答えた。そしてまた言った。

「けれどここにいる筈はないし」

「そうだ」

マニフィコはその言葉に同意した。

「しかもあれの服といえばどれも灰まみれでボロボロのものばかりだ」

「間違つてもドレスなんか着れないわ」

「そうよね、何かおかしいわ」

「そうだな」

三人はヒソヒソとそう話をしていた。貴婦人はそれを気付かれないように横目で見てている。

## 第一幕その六

「半信半疑ね」

内心そつ思ひとおかしかつた。だがそれは決して顔には出さなかつた。ラリー口はやはり彼女から目を離さない。そしてアリードー口にそつと囁いた。

「聞きたいことがある」

「は」

アリードー口はにこりと笑つてそれに応えた。

「まさかあの貴婦人は」

「ええ、わかつてありますよ」

彼はそれに頷いてみせた。

「殿下の思つておられる通りでござります」

「ふむ、そうか」

彼はそれを聞いて頷いた。

「そうだったのか。先生」

「はい」

「よくぞやつて下さいました」

「いえいえ

「彼女が私の……」

「おつと殿下」

だが彼はこゝでラリー口の言葉を遮つた。

「まだまだ舞台は続きますぞ。全てが終わつてからでも宜しいでしょ」

「それもやうか

「左様です。それまでゆつくつとも楽しめ下せ」

「ではそつとさせてもらひつよ」

「どうぞ」

そして彼等は戻つた。ダンティリーも乗つっていた。

「さて、皆さん」

彼は一同に語り掛けていた。

「それでは食卓へ参りましょひ。そして心ゆくまで楽しみましょひ」

「はい」

「是非とも」

皆それに頷いた。つい先程までマーフィコと一緒に飲んでいた者達もである。顔は赤くなっているがまだまだ飲み足りないようであつた。

「そなた達も一緒にな」

「はい」

ダンディイーーーはいーーーでの従者達にも声をかけていた。この国では宴は身分を問わず参加してもよいのだ。その方が楽しめるからであると共に王家の懐の広さを宣伝する意味もあつた。

「それでは殿下、いちらりく

「うむ」

彼は従者に案内されながら頷く。そして歩きながら考えていた。

「今日はたつぱりと楽しませてもらひつか」

これから食事や酒のことを考えると自然と口元が緩んできた。

「四人分は食べさせてもらうとするか」

そしてそのまま向かう。後に他の者が従つ。

「さて、貴女も」

いじでアリドーロが貴婦人に声をかけた。

「はい」

貴婦人はそれに頷く。そしてアリドーロに案内されて宴の場に向

かう。

「先生」

ラミー口はまたアリドーロに声をかけた。アリドーロはやがて顔を向ける。

「こよいよですね」

「はい」

「これから

「そう、これから」

彼はラミー口に言つてそう頷く。

「第一幕の幕開けといったところですかな、ほほほ」  
そう含み笑いをした。そして進む。マニフィーと一人の娘達も当然一緒にだる。彼等はまだヒソヒソと話をしていた。

「やはり似ておるな」

「そうよね」

「全くだわ」

三人はそう話し込んでいた。

「けれどここにはいない筈よ」

「そうそう、家に残つているんだから」

「そうじやよな」

三人はそこで頷き合つた。

「だからあの貴婦人はチエネレントラではない。しかし」

「引っ掛けたわね」

「全く」

「それに嫌な予感もするのう」

マニフィー口はここで暗い顔をしてそう言った。

そう言いながらも一行は宴の場へ向かつた。そしてとりあえずはその宴を楽しむのであった。だがそれは新たな宴の幕開けに過ぎなかつたのだ。

## 第三幕の一

### 第三幕 謎の姫

宴が終わった後もマーフィーは屋敷に帰らず宮殿に留まつていた。そしてその中の一室で話しかねていた。

「わづむ

マーフィーはウロウロと歩き回しながら尋ねていた。顎に手を当てて考へる顔をしていた。

「御父様、まだ考へておられるの」

「何がおわかり？」

「わからぬな」

彼は娘達にそう答えた。

「やはり似ておる。しかしだ」

「ええ」

「チエネレンツラの筈がないし」

それは「一人にもわかつてゐること」であった。

「どう考へても有り得ないわよね」

「そうよ。あの娘は今も家にいるのだから」

「そうじや。だがあまりにも似過ぎておる」

「それはそうだけれど」

「そして問題はそれだけではないのじゃ」

「それは何でして？」

「わかつておらんのか。鈍いのう

「何を？」

「だがそれでも一人は気付いていないようであった。マーフィーは

そんな娘達を見ながら溜息をついて答えた。

「やれやれだ」

そして語りはじめた。

「殿下が御前達ではなくあの女に気が向くのかも知れんのだぞ」

「まさか」

「だが二人はそれを笑い飛ばした。

「そんな筈はないわ」

「そう思うのか、本当に」

ここで娘達を問い合わせる。そう問われると彼女達も流石にドキッとした。

「ええと」

「あまり自信が・・・・」

「そうじゃひうな。当然じゃ」

マニーフィコはそれを聞いてようやく厳しい顔で頷いた。

「わしもあれ程美しい貴婦人を見たことがない」

「ええ」

「勝てると思つか」

二人共それには答えられなかつた。マニーフィコは言葉を続ける。

「そういうことじや。それにしても似ておつた」

「そうよねえ」

「仕草まで」

「物を食べる動作や飲む動作までな。どう見てもチヨネレントラじや」

「ええ」

「けれどねえ」

「繰り返さなくともよい」

マニーフィコはここで娘達が言つことがわかつていたのでそれを止めた。

「言わすともわかつておるわ

「それなら」

「本当に。まあ別人じやるわ」

「けれどもし」

「本物だつたとしたら」

「だからそれを言つなど言つておるわ」

「はい」

「要は御前達のどちらかが殿下の妃になればよいのだからな」

「それならお任せあれ」

先程の言葉は何処へ行ったのか一人は胸を張つてそれに応えた。

「しかし今」

「御父様」

二人は自信に満ちた顔で父に対して言つた。

「殿下はもう私の虜よ」

「いえ、私の」

そして例によつて張り合ひはじめた。

「だつて私の顔を見て溜息をついて下さつてこるのでですから」

「あら、私には笑顔よ」

「溜息の方が深いわ」

「笑顔の方が喜ばしいわ」

「まあ待て」

言い争いをはじめた娘達を離した。それから話を聞いた。

「つまり二人共に気があるのじゃな」

「つまりそういうことね」

「あとはどちらか選ぶだけかも」

「ほつほつほ」

マニーフィコはそれを聞くと上機嫌で笑いだした。

「それはよいことを聞いた」

「そうなの?」「

「そうじゃ。つまりわしの娘が殿下の妃になるのは確実じゃからな。これはよいことじゃ」

「言われてみれば

「そうなるわね」

「一方が溜息、一方が笑顔」

「彼はまた言つた。

「どちらにしても幸福が待つておるわ」

「じゃあ私達にも

「幸福が待つているのね」

「その通りじゃ」

彼は娘達に笑顔でそう答えた。

「今の我が家の惨状は知つていよ」

「はい」

一人はそれを聞くと暗い顔になつた。

「借金まみれで家にある物はあらかた質屋行きになつてある。わたしの長靴までな」

「そうよね」

「私達のものだつてそうだし」

「だがそれももう少しの辛抱、借金は消えてなくなる」

「そうよね」

「お妃になるのだから」

「逆にわしのところには嘆願書の山が来るであらうな。それこそが我が望み」

話してこるついで機嫌がよくなつてきた。そして言葉を続けた。

「よいな、父を見捨てるでないぞ」

「ええ

「勿論よ、御父様」

「それさえわかつていればよい。うつむ、見える、見えるぞ、誰も彼もがわしのところにやつて來るのが

さらに続ける。

「お妃様にとりなして下さいと。チヨコレートや金貨を持って来てな。話しておきましょ、と答えるともうそこには香水と化粧で武装した貴婦人が立つてゐる。銀貨を持ってな」

取らぬ狸の皮算用に耽つてゐた。しかし彼はそれには気付かない。

「それにもまあ宜しいでしようと返す。休んで目を開けるとベッドの周りにはわしに頼みごとをする者達の行列が取り囲んである。引き立てに罪の許し、就職口、入札に教授になりたいだの鰻の漁、そ

して嘆願書に囲まれるのぢや。陳情書もあるが  
「何て素晴らしい」  
「黄金みたい」  
「黄金か」  
すぐ近くの言葉に反応した。

## 第二幕その一

「黄金もあるな。メンドリにチョウザメにワインに綿にドーナツにパイに砂糖漬に金平糖に金貨に銀貨。もうたまりかねてこり叫ぶのだ。もう部屋に入りきらないから止めてくれ、一人にしてくれ、とな。それでもわしは一人にはなれない。いつも側に誰かがいてくれる。何とも楽しいことじやないか」

「周りに人がいつも」

「何で嬉しいことなかしら」

「どうやらこの三人は意外と人間が好きなようである。根は寂しがりやなのだろうか。」

「そう、人がいつも側にある。それだけで楽しいことじやが」

「物が溢れご馳走まで」

「うつとりするわ」

「それも御前達次第じやぞ。それでは」

「ええ」

「また化粧をなおさなくちや」

「髪もだぞ」

「わかつてるわ」

「お任せあれ」

こうして娘達は部屋を出た。後にはマニーフィコだけが残った。彼はまだ笑っていた。

「勝つたかのう」

暫くして彼も部屋を出た。後には何もなかつたが取らぬ狸の皮算用だけが残つていた。その入れ替わりにラミー口達が部屋に入つて来た。

「それで」

「はい」

アリードー口が彼に応える。

「あの娘のことなのですが」

「殿下の仰りたいことはわかつておりますよ」

彼は笑顔でそう答えた。

「それなら話が早い。しかし問題があります」

「何でしょうか」

「ダンディーーーの」とですが

「彼が一体」

「どうもあの娘に恋をしているようなのです」

「どうやらそのようですね」

それは彼にもわかつていたことであった。頷いた。

「先生もそれを察しておられましたか」

「はい」

また頷いた。

「何とかせねば、と思つていたところです」

「ふむ」

ラミーー口もそれを聞いて頷いた。

「御考えがあるようですね」

「ええ、それは」

言おうとしたところで誰かが入つて來た。

「殿下」

「ええ」

二人はそれを受けたカーテンの奥に隠れた。そして入つて來た者達を見た。それはダンディーーーとあの貴婦人であった。ラミーー口はそれを見て顔を曇らせた。

「やはりな」

「殿下」

しかしここでアリードーー口が彼を嗜めた。

「状況を見極めるのも手ですぞ」

「わかりました」

彼はそれに従うことにした。そして事の成り行きをカーテンの奥

から見守ることにした。

ダンディーはそれに気が付いてはいない。貴婦人を熱い目で見ながら言葉をかけていた。

「どうかお受けになつて頂けませんか」

「それは出来ません」

貴婦人は頑なな態度でそれを拒絶していた。

「申し訳ありませんが私にはそんな資格は」

「いえ」

だがそれでもダンディーは引き下がらなかつた。

「私はもう貴女しか目に入らないのです」

「しかし」

貴婦人はここにまた言葉を返した。

「私が他の方に恋をしているとしたら」

「うつ」

それを聞くと流石に言葉に詰まつた。

「それを私に申し上げられるのですか」

「残念ですが」

彼女は済まなさそうにそう返す。

「わかりました」

彼はそれを聞いて観念した言葉を出した。

「どうやら私と貴女は結ばれる運命にはなかつたようだす」

「は」

「残念ですが私は身を引きあましよ。ヒカルド」

「はい」

彼はここで質問を変えた。

「それは一体どなたですか。貴女を想いを寄せられておられるのは  
「申し上げても宜しいですか」

「はい」

彼は答えた。

「わかりました」

貴婦人はそれを受けてあらためて口を開いた。そしてダンディー二に對して言つた。

「あの従者の方です」

「えつ」

「何と」

それを聞いてダンディー二だけでなくカーテンの奥に隠れていたラミー口達も思わず声をあげた。アリドーロはそれを聞いて会心の笑みを浮かべていた。我が意の通り、といったところであった。

## 第二幕その二

「何といふことだ、信じられない」

「見事な運び」

ラミー口とアリドー口はそれぞれそう呟いていた。そして二人は前に出て来た。

「おや」

ダンディーはそれを見て声をあげた。

「先生、そこにおられたのですか。そして君も」

「はい」

「お話の邪魔かと思い姿を隠しておりました」

二人は頭を垂れてそう述べた。貴婦人は話を聞かれていたのを知り顔を真つ赤にしていた。

「貴女に御聞きしたいのですが」

「はい」

ラミー口は貴婦人に対してそう声をかけてきた。

「地位や富はいらないのでしょつか。生憎私の家はあまりお金も地位もありませんが」

「構いません」

貴婦人は静かにそう答えた。

「私にとつての栄華と富は」

「はい」

「美德と愛です」

「何と・・・・・」

ラミー口達はそれを聞いて感嘆の言葉を漏らした。今まで地位や富のことばかり考えているマーフィ口達を見てきたからそれは当然であった。

「それでは私の妻となつて頂けるのですね」

「それは・・・・・・」

しかし彼女はここで戸惑いを見せた。

「貴方はまだ私のことをよく御存知ありませんし」

「それはそうですが」

「私は財産もありません。それでも宜しければ「財産なぞ求めてはおりません」

ラミー口もそう言つた。

「私は貴女だけが望みなのですから」

「そうなのでですか」

「はい。そして改めて言います」

彼は畏まつてそれに答えた。

「すぐにでも貴女を妻に」

「お待ち下さい」

しかし彼女はそれを止めた。

「何故ですか」

「これを」

「」で左手の薬指の指輪を外して彼に与えた。

「」に同じ指輪があります

「はい」

見れば彼女の右手の薬指に同じ指輪があつた。

「私をお探し下さい。」の指輪を。そしてそれが見つけられた時こそ

そ

「貴女は私の妻に」

「はい」

彼女はそれに答えて頷いた。

「喜んで貴方の妻となりましょ」

「わかりました。それでは」

「はい。お待ちしておりますね」

こうして彼女は部屋を後にした。そして宮殿も後にしたのであった。ラミー口達がその場に残つた。

「どう思つ」

ラミー 口は一人にまず尋ねた。

「そうですね」

まずはダンディーーがそれに応えた。

「少なくとも私はもう主役ではないようです」

「といふと」

「彼女の心が殿下にあるからであります」

「そうか」

だが彼はそれには笑わなかつた。続けてアリドーロに問いつ。

「先生」

「はい」

「先生はこれについてどう思われますか」

「そうですね」

彼は暫し考え込んだ後それに答えた。

「殿下の思われるままに」

「わかりました」

彼は師のその言葉に頷いた。それから言つた。

「それでは早速行くとしましょつ。思い立つたが吉です」

「はい」

「ダンディーー」

今度は彼に顔を向けた。

「そういうことだ。今まで御苦労」

「いえいえ」

笑顔で応えてはいるが何処か寂しそうな笑顔であった。

「彼等にも帰つてもうつようになつた」

「わかりました」

「そして」

彼は次々に指示を出す。その動きはかなり機敏なものであった。

「馬車の用意を。わかつたね」

「はい」

ダンディーーがまた頷く。

「絶対に彼女を見つけ出すぞ。彼女が例えコピテルの手の中にあっても」

「また大胆な」

アリドーロがそれを聞いて笑った。コピテル、すなわちゼウスの好色さは最早言ひまでもないことである。なおこの神は実は男色家でもあり鷲に変身して美少年をさらつたこともある。黄道十一宮の一つ水瓶座の少年である。

「この指輪と愛に誓おう。何としても見つけ出そう」

「殿下」

ここで家臣達が入つて来た。そして彼の周りを取り囲む。「参りましよう、美の女神を手に入れに」

「うむ」

彼は家臣達の言葉に頷いた。

「しかし今は不安だ。冷たい不安が確かに心の中にある」  
果たして彼女を見つけることができるのか、そう考へると不安でならなかつたのである。

「しかしそれ以上の甘美な希望が心を支配している。今はその希望に従おう」

「殿下の望まれるままに」

「うん。それでは皆行こう」

「はい」

「愛を手に入れに」

そして彼は家臣達と共に部屋を後にして、そして馬車に向かって行つた。アリドーロはそれを見て一人微笑んでいた。

「これでよし」

彼にとつては望み通りのシナリオであった。

「後は馬車を男爵家のすぐ側でこかせばいいな。ふむふむ」

そして彼も馬車へ向かつた。後にはダンディー二だけが残つた。

「何か急に話が終わつたなあ」

いきなり王子役が終わり彼は呆然としていた。

「 わらわもひとと楽しめると思つたんだがなあ。世の中はやうやう上手くはできへばいいこといふことか」

「 殿下」

しかしこれは世の中がやうやく上手くは出来てこないと思つてこる  
者がやつて來た。

「男爵」

「お願いしたいことがあるのですが、マーフィーはどのようにわけかかなり燒てていてる様子であった。

「何でしちゃうか」

「私の娘達のことですが」

「はー」

「急に熱が出たようでした」

「それはお氣の毒」

「それでお願いがあるので、

「はー」

マーフィーはダンティーーの素つ氣無い様子にも一向に気付いてはいなかつた。自分のことだけで頭の中が一杯であったからであつた。

「僭越ながら

「はー」

「じ選考を早くお願いしたいのですが

さう言つて上田遣いにダンティーーを見た。彼の顔色を窺つているのだ。

「宜しいでしちゃうか

「そんなことでした」

ダンティーーは笑つてそれに応えた。

「もう済んでおつまよ

「本當ですかー?」

「はー」

飛び上がらんばかりのマーフィーは對して笑ひ落とした。

「もうとっくに

「それは有り難い。そして

「はい」

やはりダンディーの醒めた態度には気付かない。

「それでは娘達のどちらが」

「いずれわかりますよ、すぐにね」

「どちらですか？テイズベですか？クロコンテですか？」

「まあまあ

彼ははやるマーフィーを嗜めた。

「そんなに焦らないで」

「しかし私は一人の父親ですので」

「秘密です」

「それはわかつておりますが」

「余程心配なようですが」

「はい」

彼はそれを認めた。我慢なぞできる筈もなかつた。

「仕方ないですな」

ダンディーはそれを受けて演技を再開することにした。

「それでは

「はい」

ダンディーはここで辺りを見回した。

「誰もいませんな」

「蠅一匹として」

「ならばいいでしょう。それでは

「はい」

「まあ落ち着いてお話ししましょう。どうぞ」

彼はここでマーフィーに椅子に座るよつて薦めた。マーフィーも

それに従つた。

一人は席に着いた。そして向かって話はじめた。

「これで宜しいですか

「はい」

ダンディーは頷いた。

「まあ」れからお話をうなじですが

「はい」

「実に奇妙な話ではあります」

「奇妙な話！？」

「はい」

マニー・コはもう言られて心の中で考えた。ビビリもわからなかつた。

（それは一体どうこうことだ）

（ここで彼は妙なことを考へはじめた。

（わしと結婚したとかそういうことではないだらうな）

（だがそれは幸いにして違つていた。ダンディーは言つた。

「まずお約束願いたい」

「はい」

「誰にも言こませんな

「勿論です」

マニー・コは自信を以つてそう答えた。

「私程口の固い者はそうはおつませぬ

「そうですか」

「はい。私は心に鍵付箱を持つておつりますからな

「それは何よりです」

あまり信用してはいないような口調であつたがマニー・コはそれには気付かなかつた。そしてダンディーはまた言つた。

「それでは言こましよう

「はい」

「貴方にだけ」

あえてもつたいたぶつてやつひひ。マニー・コは神経を集中させた。

「賢明にして年老いた方は

「はい」

「常に良き忠告を為れるのです」

「そのようですね」

「やつした方の」令嬢と結婚したなりば妻をどうのよつて元ひじに遇かるべきでしょうか」

（やつた！）

マニフィコはそれを聞いて心の中で小躍りした。

「そうですね」

そして答えに入った。

「厚く遇するべきだと思いますが」

「そう思われますか

「は」

彼は笑顔で答えた。

「そしてその賢者も厚遇するべきだと思いませんが

「ふむ」

「賢者を厚遇するには國の務めでござります」

「それはやつですな」

「はい」

彼は何とか自分の有利な方に話を持つて行こうと考えていた。そして話をしていた。

「礼服の召使を三十人程」

「はい」

「馬も百十六頭程」

「はい」

「賓客がひつきりなしに来てもいいよつな屋敷

「はい」

「宴の場にお菓子に馬車。多くのものが必要となります」「また豪勢なものになりますな」

「御言葉ですが」

彼はそれでもさらにはけ加えてきた。

「それでもまだ足りないと思います」

「といいますと」

「はい」

彼は答えた。

## 第二幕の五

「賢者は國の宝なのですか？」  
「それはわかつておりますよ」  
「ならばいいのですが」  
「男爵」  
　彼はあらためてマーフィーに顔を向けた。  
「はい」  
「貴方には隠し事はしないです、決して」  
「それはわかつております」  
「ですが」  
「ですが」  
「残念なことにお互いかなり離れた場所に立つてありますな」  
「そうでしょうか」  
「ええ、残念ながら」  
　彼はそう答えた。  
「私は宴を開くことはないのです」  
「ご冗談を」  
「いやいや」  
　マーフィーはそれを笑い飛ばしたがダンティリーは否定しなかつた。  
「常に徒歩で贅沢なものも口にしません」  
「殿下がですか。まさか」  
「いや、それが」  
　彼は言葉を続ける。  
「本当なのですよ」  
「からかわれているのでしょうか？」  
「そう思われますか？」  
「はい」

「マニーフィー」は答えた。

「殿下、『じ』[冗談が過ぎますぞ]

「これが[冗談ではありません]」

「ダンディーーーはペシャリ」とうつ答えた。

「その証拠に私は王子ではありません」

「えつ！？」

「私は影武者なのですから」

「またそのような」

「いえ、それが本当に。私はダンディーーーとここにます」

「彼はここにそうちに乗った。」

「王子の従者であります。私達は入れ替わっていたのです」

「嘘でしょ」

「嘘ではありませんよ」

「彼はそれを否定した。」

「何なら証拠でも。すぐにわかりますよ」

「何と・・・・・・」

「これには流石に閉口してしまった。それでいて開いた口が塞がらなくなつてしまっていた。」

「殿下の身の周りのお世話をすることが私の仕事です。まあ貴族なのは確かですがね」

「何としたことじや。わしともあらう者が」

「マニーフィー」はようやく口を開じてそつ言つた。

「まんまと騙されておったわ」

「まあまあ

「まあまあではありますんぞ」

「彼はダンディーーーに対してそつ言つ返した。」

「殿下も貴方も何を考えてそのような」

「それはすぐにわかる気になると思つますよ」

「彼はそう言葉を返した。」

「すぐにね」

そして言葉を続けた。

「屋敷に帰られれば

「いや」

だがマーフィーは「いい」で首を横に振った。

「帰りはしませぬぞ

「ここはお引取りを

「何故ですか

「それもすぐにわかることがあります

「言つておきますが

「はい」

「私も貴族です

「ええ、存じておりますよ

ダンディーはそれを聞いても臆してはいなかつた。

「私もそうですから

「それではおわかりだと思ひますが

「はい」

「この御氣はされましませぬぞ

「まあ御氣を鎮められて

「そうですね」

苦虫を噛み潰した様な顔でそれに応える。

「貴族は分別も備えているものですから

「はい」

「ここは下がらせてもらいましょう。ただし

「何でしゅう

マーフィーに声をかけた。彼は席を立つて振り向いて答えた。

「このことは忘れませんからな

「はい」

それを聞き流した。そしてマーフィーを見送った。

「さてと

彼はそれを見届けると立ち上がった。

「それではこっちも行くとするか」

そして彼も部屋を後にした。入れ替わりにアリドーロが部屋に戻ってきた。

「いかんいかん」

彼は部屋の中で何かを探していた。

「マントを忘れておったわ」

彼はカーテンの裏を探した。そしてマントを取り出しそれを身に纏つた。

「これでよし。ふむ」

身に纏つてから辺りを見回した。

「ダンディー二も行つたかな。なりばよい」

それを確認して満足したようであつた。

「彼の同行は殿下も望んでおられるからな。さて」

彼は部屋を後にした。扉に手をかけてから呟いた。

「私も行かねばな。早く追いつかねば」

それから部屋を出た。部屋の灯りはそのままであつたがやがて従者達が来てそれを消した。そして後には暗闇だけが残つた。

## 第四幕その一

### 第四幕 明かされた眞実

マニフィコはダンティーーと別れた後娘達を連れて足早に宮殿を後にした。そして一路自分の屋敷に向かつて行つた。彼は馬車の中で撫然としていた。

「御父様、どうしたの？」

ティーズベが不機嫌そうな顔の父に尋ねた。

「何だか急に機嫌が悪くなられたようだけれど」

「何でもない」

彼は撫然とした声でそれに答えた。

「だから気にするな。よいな」

彼女はそれに頷くしかなかつた。クローリングテもそれは同じであつた。

「え、ええ」

「それよりもだ」

「はい」

マニフィコはここで話を変えてきた。

「あの娘はどうしているかだ」

「あの娘って？」

二人はそれを聞いて首を傾げた。

「一体誰のこと？」

「わかつておらんな、チヒネレントラのことだ」

マニフィコは要領を得ない娘達に少し怒りを覚えながら言った。

「今何処にいるかだ」

「そんなの決まつてゐるわ

「ねえ」

二人はそう言つて顔を見合わせた。

「確かにな

実はマニフィコにもそれはわかつていた。

「しかし宮殿のあの貴婦人」

彼はそこでまたあの麗しい貴婦人を思い出した。

「あまりにも似ておつた」

「そりだけれど」

「まさか・・・・・・」

娘達はそれについてはあまり信じてはいなかつた。有り得ないことをだと思つていたのだ。

「御父様、考へ過ぎよ」

「そりそり」

「本当にそり思うか?」

娘達にそり問うた。

「ええ

「普通に考へて有り得ないわ。だつて

二人は言葉を続けた。

「あの娘は今うちにいるのよ

「そして家事をしている筈だわ

「そりだな」

マニフィコは少し慚然とした顔でそれに頷いた。

「だがそれが果たして本当なのかどうか

「心配性ね」

「大丈夫よ」

「ううむ」

それでも彼の不安は消えなかつた。そりこう話をしている間に屋敷に着いた。

「こちらでしたね」

前から御者の声がした。

「うむ」

マニフィコはそれに応えた。

「いじじや。御苦労であつた」

「いえいえ」

「マニフイ」は御者にチップを渡した。金貨一枚であった。

「一枚ですか」

「つむ」

彼は驚く御者に笑顔で応えた。

「済まぬな。少ないか」

「いえ、そのような」

御者は一枚だと考えていたのだ。だが彼は一枚出してきたのだ。それに驚いていたのだ。

「わし等は三人だったな。よし」

マニフイはここで懐から金貨をもう一枚出した。そして御者に手渡した。

「これでどうじゅ」

「どうも」

彼はそれを受け取つて頭を下げた。そして礼を述べた。

「有り難うござります」

「礼はよござ」

彼は鷹揚にそう応えた。

「仕事に対する当然の報酬じゃからな。さて

そして娘達に顔を向けた。

「この働き者に礼を言うようにな

「ええ」

「有り難う

「こりやどうも」

彼は上機嫌でその礼に応えた。そして三人はそれを受けた後で馬車を降りた。そして屋敷の前に出た。

「さて」

マニフイは馬車が消えると自分の屋敷の門の前で一呼吸置いた。

「行くぞ」

「ええ」

「わかつたわ」

何故か娘達もそれに乗つっていた。そして二人は何故か自分の家に帰るのに身構えていた。そして屋敷に入つた。

「只今」

「お帰りなさい」

すぐに返事が返つて来た。それはあの娘のものであつた。

「おや」

「ほら」

「やつぱりいるじゃない」

一人の娘は驚いた顔をする父に対してもう言つた。

「考え過ぎよ、御父様は」

「確かに似ているけれどね」

「似ている?」

チエネレントラはそれを聞いて不思議そうな顔を作つた。

「何かあつたのですか?」

「あ、何でもないわよ」

「いいからお仕事を続けてね」

「はい」

チエネレントラはそれを受けて仕事を続けた。見れば掃除をしている。

「昔一人の王様があられました」

いつものように唄いながら掃除をしている。

「一人でいることに飽きられてお妃様を探すことになりました」

「ちょっとチエネレントラ」

それを聞いたティーズベが不満そうな顔で彼女に声をかけた。

「何か」

「いつも唄つけれど他に曲ないの?」

「そうよ」

クロリンデも続いた。

「いつもその曲じゃない。他の曲も聴かせてよ

「そう言われても」

「ああ、もういいわ」

二人はそれを聞いて匙を投げたように言った。

「どのみち貴女にはその限は合っているんだし」

「声域もね。それを間違えると大変なことになるわよ」

「はい」

そう言われてすこし戸惑っていた。

## 第四幕その一

「貴女の声は低いけれど高めなんだから  
「低いけれど・・・・・高め」

「そうよ」

「人はそこで答えた。

「貴女の声はね、低いのよ。けれどその低さにも程度があつてね」  
「はい」

「その中では高い方なの。だから唄う歌には氣をつけなさい。いい  
わね」

「わかりました」

「彼女はわからないままそれに頷いた。姉達はそれを見た後で階段  
に足をかけた。

「それじゃあね。これで休むわ」

「わしもじや」

マニフィコも浴室に向かつた。

「朝になつたら起こしてくれ」

「ご夕食は

「ああ、いい」

「私も」

「私もいいわ」

三人はそれぞれそう答えた。

「富殿で腹一杯食べてきたからな

「美味しかつたわよ」

「残念ね、行けなくて」

「いえ」

だがチエネレントラはそう嫌味を言われても態度を変えなかつた。

「私は私で」

「何があつたのかー?」

マニフィコがすぐに反応した。彼女はそれを見てすぐに見せよつとした笑みを消した。そのうえで返答した。

「満足するだけ食べられましたし」

「何だ

彼はそれを聞いて安堵した顔をした。

「何事かと思ったわい

「何があつたのですか？」

「いいや

今度は不機嫌な物腰で手を振った。

「何もない。気にするな、よいな

「はい」

「少なくとも御前には何も関係のないことじや。よいな

「わかりました」

「わかればよい。さて

彼は付けていた髪を外した。だがその中の髪型も髪と大して変わりはなかつた。

「休むとしよう。それではな

「お休みなさいませ

チエネレントラは召使の様に挨拶をした。マニフィコはそんな彼女に対して言った。

「明日の朝は玉葱のスープにしてくれ。よいな

「わかりました」

ここで外で雷鳴が轟いた。マニフィコはそれを聞いて顔を顰めさせた。

「何かよからぬ予感がするの」

すると遠くから何かが倒れて壊れる音が聴こえてきた。

「そらきた

「何か倒れたのでしょうか

「扉を開けるでないぞ

彼はここでチエネレントラにそう注意した。

「外は嵐じゃからな

「はい

聽けば外はかなりの嵐であった。風と雨の音が聽こえてくる。屋敷に激しく打ちつけていた。

「雨が入つてはかなわんからな。それでは寝よつ

そしてようやく部屋に入つとしたその時であった。扉を叩く音がした。

「あら、誰かしら

「待て、魔物かも知れぬぞ

チエネレントラは扉に向かつた。マニフィコはそれを止めようとしたが間に合わなかつた。彼女は扉を開けた。するとそこにはダンディー二がいた。

「殿下

「殿下ではないわ

マニフィコはチエネレントラの後ろで屹々として立つた。

「彼は偽者なのじや

「そうですね！？

「ははは

ダンディー二はそれに笑いながら答えた。

「確かに私は偽者でした

「何と

「それみろ

マニフィコは不機嫌そのものの顔で彼等の側にやつて來た。そしてこう言つた。

「一体何の用なのですかな

「何がありましたの

「嵐で家が壊れたの？

上にいる娘達も出て來た。そして下に降りて來た。

「あつ

そしてダンディー二を見た。一人ももう彼のことは知つていた。

一応頭は下がったがそれだけであった。恭しく礼をする気にはもうなれなかつた。

「やあ、どうも」

「何か御用ですか?」

「二人はあからさまに嫌そうな顔でダンティリーを見た。

「いや、何

彼はそれをおものともせず余裕を以つて応えていた。

「実はトラブルが起つてしまつて」

「ほう」

マニーフィコは何かを探るような顔で彼を見ていた。

「私も今日はえらいトラブルに巻き込まれましたぞ」

「ははは、そうでしたか」

「他ならぬじなたかのせいですね。まあそれはいいことです」

「はい」

「それで何か起つたのですかな」

「実は殿下がこの近くにおられまして」

「本当ですか!?

それを聞くとやはり普通ではいられなかつた。マニーフィコと二人

の娘達は声をあげた。

「はい、馬車で移動されていまして」

「それで」

「その馬車が転倒してしまつたのです。それでご助力を願いたいの

ですが」

「そうこうことなら

マニーフィコは胸をドンと叩いてそれに答えた。

## 第四幕その二

「我が命、殿下に捧げるつもりです」

「それは有り難い」

それを聞いてダンディーは笑顔で頷いた。

「チエネレントラ」

マニフィコはここでチエネレントラに顔を向けた。

「はい」

「温かいものの用意を」

「わかりました」

彼女は台所に入った。マニフィコはそれを見届けてからダンディーに顔を戻した。

「そして殿下はどちらに」

「はい」

ダンディーは頷いた。それから扉の前の道を開けた。そこから一人の貴公子が姿を現わした。

「ここがマニフィコ男爵のお屋敷ですな」

「はい、殿下」

ダンディーはラミー口にそう答えた。

「そしてこちらにおられるのが」

「この屋敷の主人でござります。そしてここにいるのが娘達でござります」

「はじめまして」

二人は恭しく頭を垂れた。

「顔をお上げ下さ」

ラミー口は三人に対してそう言った。三人はそれに従い顔を上げた。

「殿下、ご無事ですか」

マニフィコはまず彼にそう声をかけた。

「心配はいりません」

「ラミー口は微笑んでそれに答えた。

「馬車がこけただけですか。誰も怪我はしませんでした」

「そうですか。それは何より」

「別の馬車がすぐに来ますし。それまでの間こいつにいても宜しいでしょうか」

「是非とも」

マニーフィコは笑顔でそれに応えた。そして恭しくうつ語った。

「しかしお身体が冷えられたでしょう」

「いえ、別に。お構いなく」

「そういうわけにはいきません。チエネレントラ」

台所の方に声をかけた。

「もう出来ているか」

「はい」

台所の方から声がした。そしてコーヒーを持つて来たチエネレントラがやって来た。

「むつ

「まさか

「そんな

「二人は互いの顔を見て呆然となつた。あやつらコーヒーを落としきになる程であった。

「おい、危ない」

それに驚いたマニーフィコが慌てて声をかけた。

「あつ

すんでのところでそれに気が付いた。チエネレントラはコーヒーを戻した。

「一体どうしたんだ」

「あ、何でもありません」

一  
い  
や

慌てて取り繕うチヨネレンストラに對してラミー口が前に出た。

「何か！？」

— はい。 — ダンテイー —

「な」

「ちよつと『コーヒー』を持つていてくれ」

わがりました。お嬢様

前に進み出た。

ちよことの「ヒー」を押借

つた。ラミー口が彼女の前  
「まさか・・・・・・」

「…」口は彼女にござりと答へるものあがなのです

の顔は蒼白となっていた。その場から去ろうとした。

「そんた」

だがラミー口はそれを止めた。そして彼女に対して言った。

「あの約束、覚えておられますね」

卷之三

「それでなが井を

「ハーロの言つままに手を差し出す。彼はそこに指輪をはめた。

それで全ては決まった

「これでよし」

「全ては」

アリドーロはそれを見て会心の笑みを浮かべた。そして二人の間に  
に来てこう言った。

「只今殿下のお妃が決まりました」

「えつ！？」

それを聞いてマニーフィコ達はやや場違いとも思える声を出した。

「あの、今何と」

「ですからお妃が決まりましたと」

アリドーロは済ました様子でそう答えた。

「冗談ですよね」

「いいえ」

その言葉に首を横に振った。

「まさか」

「またまたそんな」

「私は嘘は申しませんよ」

「それでは私達は」

「残念でした」

ティーズベとクロリンクテにはそう答えた。

## 第四幕その四

「殿下のお妃様はこの方に決まつていたのです」

「何時の間に」

「貴女達の知らない間にです」

「私も知りませんでしたが」

「男爵」

まだ話がわかつていないマニーフィコに対して語つた。

「時間は一つではないのです」

「といいますと」

「私は今ここに時計を持っておりますね」

「はい」

ここで彼は懐から懐中時計を取り出してマニーフィコに見せた。

「そして貴方も持つておられますね」

「ええ、こちらに」

マニーフィコもそれに留つて時計を取り出した。

「持つてありますよ」

「はい。そしてあちらにもありますね」

今度は屋敷の壁にかけてある時計を指差した。古い時計であった。

「はい」

「そういうことです。時間は全ての人がそれ持つてているのです。おわかりになられましたか」

「ううむ」

そう言われてもまだもつ一つわからなかつた。マニーフィコは首を傾げていた。

「わかつたようなわからないような」

「まあおいおいおわかりになればいいことです。さて」

「彼は話を元に戻してきた。

「何はともあれこれで殿下はお妃を迎えることになつたわけで

す

「それはお待ち下さい」

マニーフィコは慌ててアリドーロを止めようとす。

「何故ですか」

「この娘ですが」

「はい」

「女中ですよ。それがお妃には」

「おや、おかしいですな」

アリドーロはそれを聞いておかしそうに笑った。

「確かにこの屋敷には三人の娘がいた筈ですが」

「死んだと申し上げましたが」

「死亡通知は届いておりませんよ」

「うつ・・・・・」

そこまで調べられているとなると事情が違っていた。マニーフィコ

は言葉を止めた。

「彼女は確かに貴方の一番目の奥方の連れ子でしたな」

「はい・・・・・」

ここまでシラを切れる程図太い人間ではなかつた。彼は止むを得なくそれを認めた。

「それでは男爵家の者であることには変わりがありません。それはそちらの御一人と同じ資格があるのです」

「確かにそうですが」

「まだ何か仰りたい」とは

「いえ」

流石にこれには参つてしまつた。もつ何も言えなかつた。

「それでは宜しいですな」

「はい」

「じゃあ私達は」

「とんだくたびれもうけというわけですね」

「ははは、人生は長いです。そういうこともありますぞ」

アリードー口はそう言って一人を慰めた。

「まあ少しは人生の勉強になつたことでしょう」

「高い授業料だったわ」

「こんな高いのははじめてよ」

「払わせたのは私ですがな」

「ここでダンディーが出て来て笑顔でそう言った。一人はそれを見て口を尖らせた。

「そうよ、上手く騙されたわよ」

「貴方役者になつたら。成功するわよ」

「生憎私は今の仕事が気に入つておりまして」

「彼は一人にそうすげなく返した。

「他の仕事に就く気はありません」

「フン」

「調子がいいんだから」

「ははは」

ラミー口はその一部始終を見ていた。そして話が終わるのを見届けてから静かにこいつ言った。

「もういいか」

「あ、はい」

これに一同畏まった。彼はそれを見届けるとまた口を開いた。

「それでは今ここに宣言する」

「はい」

「私はこの女性を生涯の伴侶とする。よいな」

「是非ともそうなさいません」

「殿下とお妃に神の御加護があらんことを」

「うむ」

アリードー口とダンディーの祝辞に微笑みを以つて答える。そして今度はチョネレントラに顔を向けた。

「宜しいですか

「お待ち下さい」

だがそれでも彼女は首を縦に振るうとはしなかった。

「どうしてですか。約束は果たしたといふのに」

「しかし」

「まだ何かあるのですか」

「はい」

彼女は頷いた。そしてマニーフィコ達に顔を向けた。

「の方達が」

「あの者達がどうしたのですか」

ラミー口はマニーフィコ達に顔を向けて不思議そうな顔をした。

「彼等が貴女に冷たくしていたことは私も知っておりますよ」

「いいえ」

だがチエネントラはそれには首を横に振った。

「私はそうは思ってはおりません」

「何故ですか」

それを聞いてさらに不思議に思つた。

「今までのことを最もよく御存知なのは貴女でしじょう」

「確かにそうです」

それは彼女も認めた。

「けれどだからこそ、です」

「だからこそ」

「そうです。私はの方達のことをよく知つてゐるつもりです」

「ふむ」

アリードー口はそれを見てまた微笑んだ。

「私が思つていた以上だな。よくできた方だ」

次にマニーフィコ達に顔を向ける。見れば三人は暗い顔をしてヒソヒソと話していた。

「参つたことになつたな」

「そうね」

「今まで冷たくしてきたし。これからどうなるのかしら」

「これがのう」

マーフィーは両手で自分の首を締める動作をしてみせた。

「お妃様を怒らせた船で」

「そんな・・・・・・・・」

「こや、わひとかうなわんが」

マーフィーはさう言しながら暗い顔をしたままであった。

「今までのことを思つとな」

「わづみね」

娘達もそれを聞くと暗澹たる気持ひになつてゐた。

「あれだけのことをしてきただから」

「きつとね・・・・・・・・

「つむ」

「お困りのよひですな」

やへアリードー口が声をかけてきた。

## 第四幕その五

「恐ろしいですか、今の状況が  
「ええ」  
「正直に申し上げますと」「三人はそれぞれ答えた。  
「私達は縛り首でしょうが  
「それで済むかしら」  
「ハツ裂きかも知れんのう」  
「ハツ裂き・・・・・」  
娘達はそれを聞いて顔をさうに青くさせた。恐怖に心が支配され  
てしまっていた。  
「そんな・・・・・」  
「よくて車輪刑」  
車輪で両手両脚を碎く処刑である。歐州では比較的ポピュラーな  
刑罰であった。  
「いや、逆さ鋸引きかも」  
「止めてよ・・・・・」  
「そんなの聞いていられないわ」  
「しかしあし等の運命はもう・・・・・」  
マニフィコもそれは同じであった。やはり彼等は死の恐怖に怯えていたのだ。  
「大丈夫ですよ」  
しかしアリドーはここでそつ言つて三人を安心させようとした。  
だが彼等はそれでも暗い顔のままであった。  
「貴方は何も知らないのです」  
マニフィコはそう語った。  
「私達と彼女のことを」  
「知つてありますよ」

だが彼はあえてそう答えた。

「知つてゐるからこそ今ここにいるのです」

「そうですか」

「御気遣いは有り難いですけれど」

「暗くはならないように」

「彼はそう言つて三人を嗜めた。

「暗い気持ちだと何事も駄目になつてしまひますぞ」

「もう駄目になつております」

「はい」

「私達を待つてゐるのは絶望だけですから」

「ふむ、確かにそうですな」

アリドーロはその言葉に頷いた。

「今までは貴方達を待つてゐるのは絶望だけです」

「はい」

「しかしそれを変えることも可能なのですぞ、希望に「またそのような」

「私達も分別はあるつもりです。大人しく裁きは受けのつもりです」

「落ちぶれたとはいへ貴族ですし」

「全てはお妃様次第だとしても」

「えつ」

三人はそれを聞いて顔を上げた。そしてアリドーロに顔を向けた。

「あの娘次第ということは」

「そのままです」

アリドーロはにこりと笑つて答えた。

「全てはお妃様の御心次第です」

「では駄目ではありませんか」

「それは私達にもわかりますわ」

「そうでしょうか、果たして」

アリドーロは思わずぶりにそう言つた。

「本当にそう思われますか」

「何を今更」

マーフィーはさう答えて首を横に振った。

「どうせ私達は」

「あの娘、いえお妃様のことは私達が最もよく知っていますわ。だからこそ」

「私達のこともわかります」

「深刻に考えておられますな」

「どうして深刻でいらっしゃるおれましょう

三人はそう返した。

「これから処刑が待つておるところの」

「私はそうは思いません

「またそう仰るが」

「お妃様は」

彼は話しあじめた。

「心優しい方です。それは私が保証します」

「先生が」

「はい」

彼はまたもやにこりと笑つてそれに応えた。

「私が最初に貴方達の屋敷にお邪魔した時のことは覚えておられますね」

「ええ

「勿論です」

ティーズベとクローリングデがそれに頷いた。

「あの時はどうも」

「はい」

二人はここでアリーデーのやんわりとした嫌味を甘んじて受け入れることにした。後悔していた故であった。

「あの時貴女方は私には何も下さいませんでしたね」

「申し訳ありません」

「本当にものがなかつたもので」

「人はそう言つて頭を下げた。

「それはわかつておりました」

「では何故

「お妃様はそんな中で私に恵んで下さつたのです、パンとコーヒーを」

「何処にそんなものが

「『自身のお食事から。それをやかなものでしたが

「そうだったの』

「あの娘だつてろくに食べていらないのに」

「そう、その中から私に恵んで下せつたのです。何と心の優しい方でしょうか」

「けれど私達は優しくはなかつた」

ティーズベはそう答えた。

「そんな者に恵みは『えられないわ

「それは違います」

だがアリドーロはまたそう答えて一人を宥めた。

「よろしいですか

「はい」

「貴方達がとられるべき道は二つあります」

「一つですか

「そうです。このまま縛り首の恐怖に怯えるか、若しくはあの方に慈悲を乞うか、です。どちらに致しますか

「そう言われても」

三人はそう言つて口籠もつた。

「私達は許されはしないでしょ」

「彼女も許すつもりなどないでしょ」

「そう思われているのですね」

「はい」

三人は頃垂れてそう答えた。

「そうとしか思われません」

「縛り首になつても宜しいのですかな」

「それは・・・・・・・・

力なく首を横に振つた。

「そうでしょ。うだうだと思つました。それでは駄目元でやつてみてはどうですか」

「許しを乞ひのですか」

「はい」

アリーダー口はそう答えて頷いた。

「それしかありませんぞ」

「わかりました」

マニフィコはそれに応えた。

「それではやつてみます」

「御父様」

「よいか」

彼は娘達に対して語りはじめた。

「よしんばわしが縛り首になるとしてもだ」

「はい」

「御前達の命だけは救つてみせるからな。あの娘が一番憎んでいるのはおそらくわしじやから」

「いえ、私がも」

「そんな、私よ」

「どうやらじょうもない連中ではなかつたらしいな」

アリーダー口はそれを見て呟いた。

「ならばよし。それでは最後の舞台に向かおう」

彼はその場を後にした。三人だけが残つていた。彼等はまだ色々と話をしていた。

「それではよいな」

最後にマニフィコがそう念を押した。

「ええ」

「それしかないわね、やつぱり

娘達が頷く。それを受けてマーフィーも決意の色を固めた。

「では決まりだ」

「はい」

そして三人もその場を後にした。こうして最後の舞台への準備は全て整つたのであった。

## 第五幕その一

第五幕 大団円

それから暫く経ちラミー口とチエネレントラの婚礼の儀が執り行われることとなつた。指輪が戻つたあの日以来チエネレントラは王宮に留まり婚礼の準備に余念がなかつた。そしてその日が遂にやつてきたのだ。

「王子様万歳！お妃様万歳！」

周りの祝う声が木靈する。その中を着飾つた一人が進む。

「妃よ」

ラミー口はうつとりとした顔で横にいる彼女を見た。

「殿下」

チエネレントラはそれに応えて笑みを彼に返した。清楚な、それでいて優美な笑みであつた。

「まだ信じられません、このよつなことが起ることはず」

「夢ではないんだ」

ラミー口は優しい声でそう応えた。

「その証拠に・・・・見るんだ」

彼は彼女の左手をとつてそれを彼女自身に見せた。

「この指輪を。今それは貴女の手にある

「はい」

「これが何よりの証拠だ。今貴女は私の妻となるのだ」

「夢ではなく本当に」

「そうだ」

「私が殿下のお妃に・・・・。何といふことでしょう」

チエネレントラは恍惚とした顔でそう呟いた。

「今まで灰にまみれていたというのに

二人はそのままゆっくりと進む。皆一人を祝福していた。その中

にあの三人もいた。

「あの・・・・・」

ティーズベが何か言おうとして止めた。三人はマニフィコを中心こ  
俯いて立っていた。

「何か

チエネレントラは彼等にその優美な微笑みを見せて応えた。

「いえ、何も」

ティーズベはその言葉を打ち消した。そしてまた俯いた。

「そうですか」

チエネレントラはそれを聞いて寂しそうに応えた。

「まだ娘と、妹と呼んでは下さこませんのね」

「私達にそのような資格はありません」

マニフィコは首を横に振つてそう返事を返した。

「今までのことを思えば

「今までのことを思え

「はい」

三人はそれに答えた。

「それでは是非娘と、妹と呼んで下さこませ

「えつ！？」

「まさか

「やはりな

アリードー口はそれを見てにこりと笑つた。見れば彼だけではなくダ  
ンディーーもいた。

「今まで私達は貴方達と共に暮らしておつましで

「使用者としてこき使つて」

「歌を下手だと言つて」

「それはもう過ぎたことです」

チエネレントラは笑つてそう言つた。

「それよりも私はこれからのことを考えたいのです」

「これからのこと」

「妃よ、それは」

「はい」

ラミー口もそれを聞いて彼女に問うた。彼女はまた微笑んでそれに応えた。

「私は玉座へと昇ります」

「はい」

「それで私達を・・・・・」

三人はそう咳きながら震えていた。だがそれでもチエネントラはそれを宥めた。

「そんなことはしませんわ」

「そんな馬鹿な」

「今までのことを思えば復讐するのが当然よ」「そうよね、それが人間ですもの」

「復讐ですか」

チエネントラはそれを聞いてまた笑った。

「復讐されることを望まれるのですか？」

「貴女がそう望まれるのなら」

三人はそう答えた。

「慎んでそれを受けましょう」

「わかりました」

チエネントラはそれを聞いて満足そうに頷いた。

「それでは復讐を致しましょう」

「はい・・・・・・」

「覚悟はできております」

三人は頭を垂れた。チエネントラはその三人に前に歩み寄った。そしてその両手を広げた。その手で彼等を包み込んだ。

「え・・・・・・」

包み込まれた彼等は驚いた顔でその手を見た。白く長い綿の手袋で包まれた、清らかな手であった。

「これが私の復讐です」

チエネントラは優美な笑みを保つたままそう言つた。

「私はこれからも、そして何時までも貴方達と家族でいたいのです。  
宜しいでしょうか」

「はい・・・・・」

三人はその手の中で頷いた。そして赤い絨毯に一粒の真珠を落とした。それで全てが許された。

「私は確かに今まで恵まれているとは言えませんでした」  
チエネントラは三人から離れるとそう語りはじめた。

## 第五幕その一

「それに耐える日々が続きました。…………けれどそれはほんの一瞬のことでした」

「そり、ほんの一瞬のことでした」

アリドーロがやつて来てそう言つた。

「全ての苦しみは一瞬のことなのです」

「先生がいつも言わわれていることですね」

「はい」

彼はアリドーロにそり答えた。

「しかしそれに耐えることこれが肝心なのです。そりですね、お妃様」

「ええ、その通りだと思います」

優雅に微笑んでそう答える。

「素晴らしい魔法の力で花の歳に私は生まれ変わりました。まるで稻妻の様に」

「それに立ち会えたのは何といつ幸運だつたのでしょうか」

ダンディーもやつて來た。

「私達も共に生まれ変わることができましたから」

「私もですか？」

マニフィコが小さな声でアリドーロに尋ねた。

「私達もでしょうか」

ティーズベとクロリンゲもであった。彼等は不安そうな顔でアリドーロに尋ねていた。

「勿論ですよ」

彼は笑顔で三人にそう答えた。

「ですから今この場におられるのです。それに先程のあれです

「あれですか？」

「はい」

彼はここで先程の真珠について言及した。

「あれこそが貴方達の改心の証。これで貴方達はお妃様と本当の意味で家族となつたのです」

「本当の意味で」

「はい」

彼は答えた。

「それは貴方達御自身が最もよくわかつておられると思いますよ」

「確かに」

三人はそれを聞いて頷いた。

「そう言わればそうだと思います」

「そうでしょう」

「では私達も貴方達の中に入つて宜しいでしょうか。お妃様をお祝いする為に」

「当然です」

アリーデー口は我が意を得たとばかりに笑みを作つてそれに応えた。

「その為に貴方達はおられるのですから」

「ならば」

三人もチヒネレンントラの周りに来た。そして彼女を取り囲んだ。

「これからも宜しくお願ひします」

「喜んで」

「それでは皆さん」

アリーデー口がその場にいる一同に対して言つた。

「これから心ゆくまで祝つとしましよう。これから続く永遠の幸せを祝福する為に」

「はい！」

シャンパンの栓が放たれた。そしてそれで部屋も人も濡らす。

「うわっ！」

ラミーロにもチヒネレンントラにも、そしてマーニフィー口達にもそれは放たれた。そして皆喜びの美酒を味わうのであった。

チエネレントラ

完

2005・3・26

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3460f/>

---

チエネレントラ

2011年4月28日00時35分発行